週刊 YEAR BOOK

1907
明治40年

# 日録20世紀

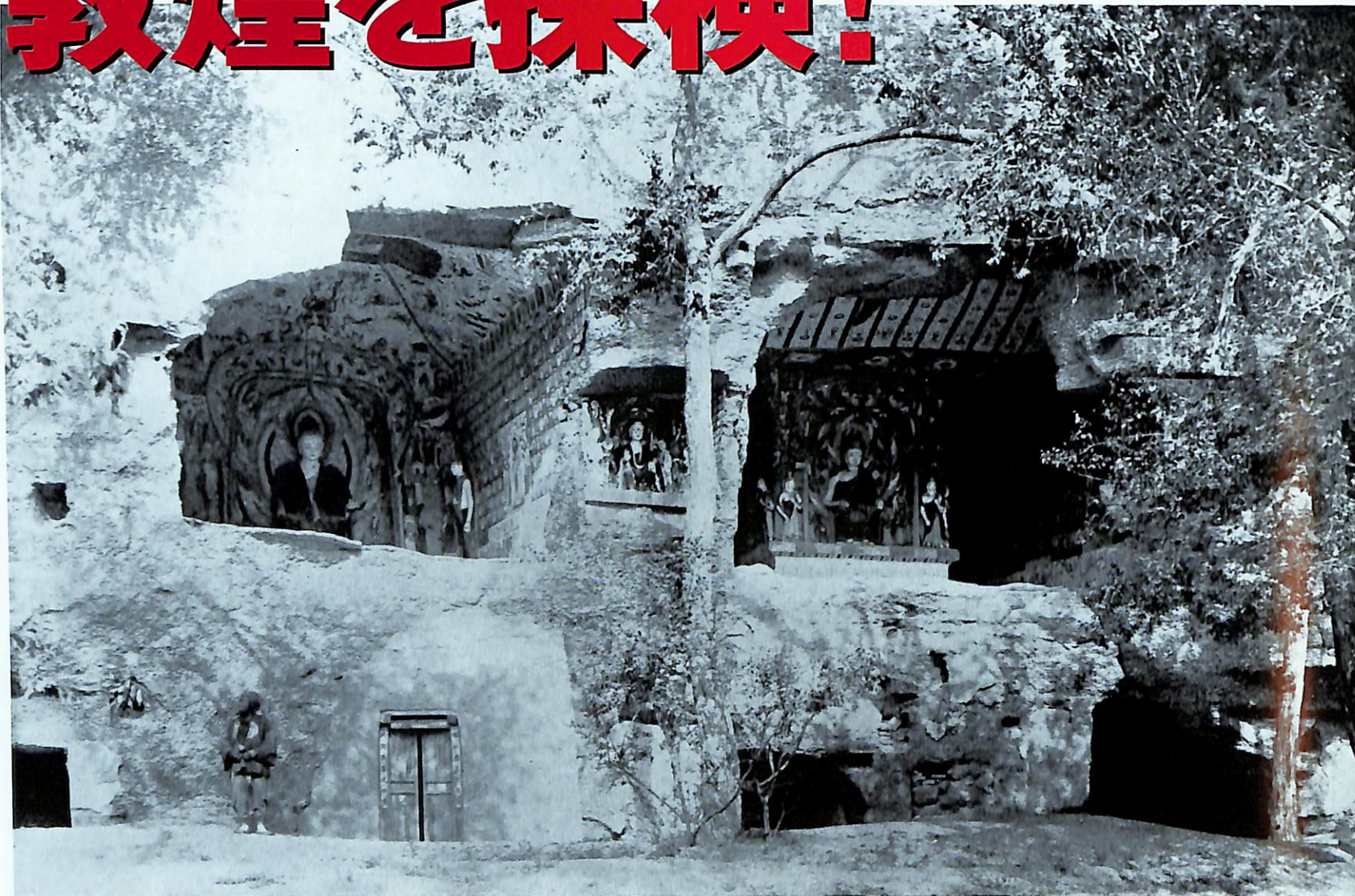
11|24
平成10年11月24日発行
(毎週1回火曜日発行)
第2巻第44号 通巻87号
平成10年7月31日第三種郵便物認可
¥560
講談社

## スタイン、敦煌を探検!

「華族令」改正で軍人に爵位大盤振る舞い!
ダイナマイトも使用!「足尾暴動」勃発
韓国皇帝が派遣した「ハーグ密使事件」の暗転

## 大英博物館に送られた写本24箱、古美術5箱
## わずか銀貨4枚で王道士から世紀の"宝物"を入手

# オーレル・スタイン、敦煌を探検！

▼スタインが敦煌を訪れた当時、1907年5月の莫高窟。左から第249、250、251窟。

大英博物館提供

一九〇七年五月二一日、イギリスの探検家、オーレル・スタインは、敦煌石窟に住みついていた道教の道士、王円籙（王道士）と初めて言葉を交わした。これを機に、九〇〇年近く小さな石室に眠っていた「敦煌文書」はヨーロッパに流出、さまざまな波紋を広げながら、いわゆる「敦煌学」が誕生する。

### 大量の仏典、美術品類を発見者・王道士から入手

間口二・八メートル、奥行き二・七メートル、高さ三メートルほどの石窟には、天井に届くほどうずたかく古文書が積み上げられていた。一九〇七年五月二三日、その様子を初めて見たオーレル・スタイン（四四）は、こう書き残している。

「石室の粗末な扉を開扉し、私等に一覧を許したのである。道士の捧げ持つ小石油灯の朧ろな光に照らし出されたその場の光景に私は思わず眼を瞠ったのであった……その小室内には二人立つだけの余地もなかった」（満鉄弘報課訳『中央亜細亜の古跡』）

古文書の見つかった敦煌は、北京の西約二〇〇〇キロに位置し、紀元前一二一年頃に前漢の武帝がここに郡をおいて以来、西域への出入り口として栄えた。四世紀後半から約一〇〇〇年にわたり、鳴沙山の断崖に四五〇を超える石窟が造営され、その多くに仏像と壁画が飾られた。とりわけ唐代の仏像、仏画は美術的価値が高いことで知られる。一九世紀後半、ヨーロッパの探検隊がこの地を訪れるようになると、敦煌石窟（莫高窟）はヨーロッ

▲「仏の七宝図」。唐代（9世紀）。絹本着色、77.5×19.0センチ。

大英博物館提供

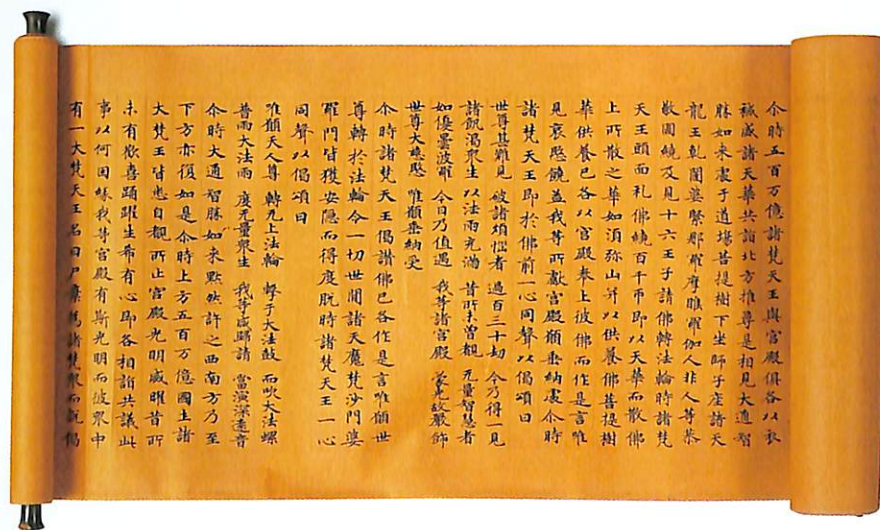
▲「天女像」。唐代（8世紀末〜9世紀初）。絹本着色、60.0×18.5センチ。

大英博物館提供

阿部徹雄提供

◀オーレル・スタイン。ここに紹介した美術品は彼が持ち帰ったもの。

▶敦煌莫高窟の景観。敦煌にある石窟群の中で最も大きい。4世紀から1000年かかって造営され、壁画、塑像など、優れた作品が多く残されている。

中国通信社

▲「妙法蓮華経 巻第三」。唐代（672年）。紙本墨書。スタインは多くの経典を入手した。

大英博物館提供

▲「観音経冊子」。唐代〜五代（9世紀末〜10世紀初）。紙本墨画淡彩。

大英博物館提供

◎表紙　スタイン探検隊のメンバー。1908年、タクラマカン砂漠の南、ホータンの東方の地で。写真中央、愛犬・ダッシュの後ろがスタイン。　大英博物館提供

大英博物館提供（見開き5点とも）

▲敦煌第16窟。右側手前に見える扉が、第17窟への入り口。もともと壁で塗りこめられていたが、王道士がこの扉を発見した。

パでも知られ始めた。

スタインは一九〇二年に莫高窟のことを知る。一九〇〇年から一九〇一年にかけてシルクロードの西域南道を調査し、ホータンやニヤなどの仏教遺跡を発掘した、このハンガリー生まれのイギリス人探検家は、以来、莫高窟の調査を宿望していた。ドイツ、フランス、ロシアの探検隊に先駆けて、敦煌石窟の美術品を撮影し、紹介する栄誉につき動かされていたのである。当時のインド政庁の援助を得た彼は、一九〇六年四月、敦煌をめざして出発した。

一九〇七年三月一二日、敦煌に到着すると、スタインは思いもかけない情報を耳にした。石窟のひとつから大量の古文書が見つかったという。

発見者は王円籙（王道士）という。出身は湖北省だが、いつしか敦煌に住み着き、道教の経典を読み、時々、托鉢に出たりして生計を立てていた。この風変わりな男は、スタインには「小心なくせにずる賢い」と映った。一九〇〇年頃に、王道士は偶然、現在「第一六窟」と呼ばれる石窟内の壁の中に隠されていた「第一七窟」で古文書を発見した。報告を受けた甘粛省の役所は、移送に銀五〇〇〇両（当時の約七〇〇〇円）がかかるため、王道士に文書を再び「第一七窟」内に封印するよう命じた。

「第一七窟」の古文書をロンドンに持ち帰ることを胸に秘め、長期滞在を覚悟したスタインが王道士に会ったのは、五月だった。仏罰と世間の悪評をおそれる王道士に対し、さっそく、スタインと彼の有能な通訳、蔣孝琬の懸命の説得と交渉が始まった。五月二三日、ついにスタインは「第一七窟」の内部を目のあたりにする。その日、別室に文書を運び出し点検が始まると、歓喜と興奮に胸が躍り、冷静さを失いかねなかったと、スタインはその感動を記している。

結局、約五〇〇ルピー（約三三〇円）に相当する銀貨四枚で、漢文書の巻物五〇包み、チベット語文書五包み、そのほかの巻物を買収。四ヵ月後、さらに古文書を買い入れた。それらは写本二四箱、古美術五箱に梱包され、一九〇九年一月、大英博物館に届けられた。現在、「スタイン・コレクション」の一部として、大英博物館に展示されているのが、この時に入手したものである。↖

▲第17窟の古文書を発見した王道士。スタインは彼との交渉のすえ、古文書などを手に入れた。

**大英博物館に送られた写本24箱、古美術5箱**
**わずか銀貨4枚で王道士から世紀の"宝物"を入手**

# オーレル・スタイン、敦煌を探検！

## 玄奘三蔵が交渉の突破口

スタインの交渉相手、王道士は当初、仏罰と世間の悪評をおそれて、スタインがちらつかせる金銭的誘惑にも首を縦に振らなかった。学術上の目的を説明しても、そのような教養を持たない彼には馬耳東風であった。ところが、スタインが七世紀の高僧、玄奘三蔵の話を持ち出すと、急に心を許し始めた。はるかインドから玄奘の足跡をたどり敦煌に来たというスタインの言葉に、彼は感動し、自分もまた仏典を求めて西域を旅した玄奘を尊敬していると語った。王道士が知っていた玄奘は、小説『西遊記』に出てくる三蔵法師だったが、ともかく、これが突破口になった。1907年5月22日夜、王道士は古文書をこっそり見せ、翌23日にはスタインを石窟へ案内したのである。

王道士は、スタインが見抜いていたように狡猾な一面を持っていた。平気で文書を隠匿し売り飛ばすばかりか、大谷探検隊にはニセ物まで売りつけた。ただ、そうして得た金は石窟の修復にあて、自分の懐に入れることは少なかった、とスタインは語っている。

▲第17窟におかれていた経典や古文書の束。麻布でくるんで、積みあげられていた。

▲スタインが3度も調査に訪れたニヤ遺跡。写真は柱などを組み立てての調査。

## 第一級資料の宝庫から流出した貴重な文化財

翌一九〇八年三月、フランス人考古学者のポール・ペリオ（当時・二九歳）が、王道士から約九〇ポンド（約七〇〇円）で大量の古文書を買い取り、フランスに送る。一九〇九年、ペリオが北京でその一部を公開すると、中国国内でも「敦煌文書」保全の声が高まった。一九一〇年一〇月、ようやく文書の北京移送が始まる。しかし、王道士による隠匿や役人による横領が行われ、北京の京師図書館におさめられたものは八〇〇〇巻余りと言われている。これに対し、中国人研究者の調べでは、スタインは約七〇〇〇巻、ペリオは約三五〇〇巻を持ち帰った。

さらに、一九一一年には日本の大谷探検隊、一九一四年にはロシア人のセルゲイ・オルデンブルグ（当時・五一歳）が王道士から「敦煌文書」を買い取り、国外へ持ち出している。大谷探検隊のものはその全容が明らかにされておらず、オルデンブルグ隊のものはロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルグ分所に保管されたまま、半世紀近く詳細がわからなかった。

現在、「第一七窟」から出た約五万点の「敦煌文書」のうち、中国国内にあるものは一万点程度にすぎない。この文書流出について、敦煌美術を研究する成城大学教授・東山健吾氏は、こう述べる。

「中国人が憤るのは当然でしょう。出土した文化財はその場所、あるいはその国のしかるべき研究機関に保管されるのが本来の姿ですから。『敦煌文書』には三つの悲劇がありました。ひとつは、監督すべき国家（清朝）が腐敗しており、文化財保護の重要性を理解していなかったこと。二つ目は、価値がわからず平気で売り渡してしまうような、王道士が発見者だったこと。三つ目は当時のヨーロッパ人探検家が多かれ少なかれ"略奪家"であったこと。ただ、スタインとペリオの場合は、大英博物館やパリ国立図書館などに保管され、多くの研究者に公開されてきたことがせめてもの幸いです」

発見された文書は四～一一世紀に作られた写本が大部分を占め、その内容は日本人を含む各国の専門家によって研究が進められた。ほとんどは仏教文献で、中には失われた仏典も含まれている。ほかに、政治、経済から軍事、医学、技術、文学など、その内容は幅広く、当時の社会、文化を知る第一級資料の宝庫と言える。特に、本文末尾に八六八年の紀年銘を持つ木版印刷の「金剛経」は、貴重な印刷物として知られる。また、紙や絹に描かれた絵画も、数千点にのぼる。

**オーレル・スタイン**（1862～1943）
イギリスの考古学者・探検家。ハンガリーのブダペスト生まれ。一八八二年、インド・ラホールの東洋学校校長に就任。インド政庁の援助で三次にわたり、中国領中央アジアを調査、敦煌で仏画・仏典を入手したことはよく知られている。

**ポール・ペリオ**（1878～1945）
フランスの東洋学者。一九〇六年より二年間、中央アジア探検隊を率い、東トルキスタンや中国西部を探検。後に北京フランス公使館付武官になる。

▲スタインは、1906年2月、楼蘭に到達する。1900年のヘディンの発見以来のことだった。

# “期待”を裏切り続けた「天皇の藩屏」作り
# 陸軍48人、海軍25人が男爵に
# 「華族令」改正で爵位大盤振る舞い！

▲明治35年6月3日、徳川慶喜が公爵を授けられた際の記念写真。この日、華族会館に徳川一門が集合した。前列右から5人目が慶喜。後列右から3人目が弟の昭武。　徳川文武提供

明治四〇年、「華族令」が改正され、当主以外も爵位を名乗れる、爵位の生前相続も可能、などと変更された。また、この年には、軍人に爵位が大盤振る舞いされた。だが、公卿、諸侯に、藩閥官僚、軍人、実業家などで構成された「天皇の藩屏」たるべき華族は、その期待に十分こたえたとは言えなかった。

## 日清戦争時と大違い 軍人に爵位を大奮発

明治四〇年九月二一日、宮中「鳳凰の間」に、礼装に威儀を正した明治天皇（五四）はじめ、明治政府の要人が一堂に会していた。皇族からは前年、宮家を創立した竹田宮恒久王（二五）、一方の席には伊藤博文（六五）、山県有朋（六九）、桂太郎（五九）、井上馨（七一）など維新の立て役者とともに、東郷平八郎（五九）、乃木希典（五七）ら軍首脳も顔をそろえていた。

この日、午前一〇時三〇分から、爵位を授ける「爵記親授・奉受式」が行われたのである。この時の受爵者は、圧倒的に軍人が多かった。陸軍から四八人、海軍からは二五人が初爵、つまり初の爵位を得た。しかも、陸軍は、山県有朋、大山巌（六四）両大将が侯爵から公爵へ格上げされ、乃木が〝二階級特進〟して伯爵となるなど、一四人の大将全員が陞爵（爵位があがること）した。海軍でも、無爵だった東郷がいっきょに伯爵となったのをはじめ、六人の大将中、軍職にあった四人全員が受陞爵した。

「日露戦争の論功行賞で軍人に対する爵位の大盤振る舞いが目立ちました。特に中将は陸海を問わず、一人をのぞき全員が受陞爵しています。日清戦争では、非出征者の受陞爵がおおむね見送られたのとは対照的です。日露戦争前に、将校に授陞爵を約束していたフシもあります。ある中将は夫人に『生きて帰れば男爵夫人、死ねば浮気な後家となれ』と書き送っていたほどです」（『華族の誕生』の著者・浅見雅男氏）

軍人の授陞爵の急増は、単純な論功行賞だけではなかった。明治政府は、華族に「天皇の藩屏（まもり役）」を期待していた。しかし、現実には華族出身の職業軍人はいっこうにふえなかった。明治一六年頃、岩倉具視を中心に、華族の子弟専用の士官学校が設けられたことがある。これは福沢諭吉がバックアップしていたが、一年あまりで挫折している。日清戦争では、華族出身の戦死者は一人としていなかった。

「明治四〇年の授陞爵には、発想を転換して、軍人を華族にすればいい、というねらいもありました」（前出・浅見氏）

## 伊藤と三条が作った「公侯伯子男」の基準

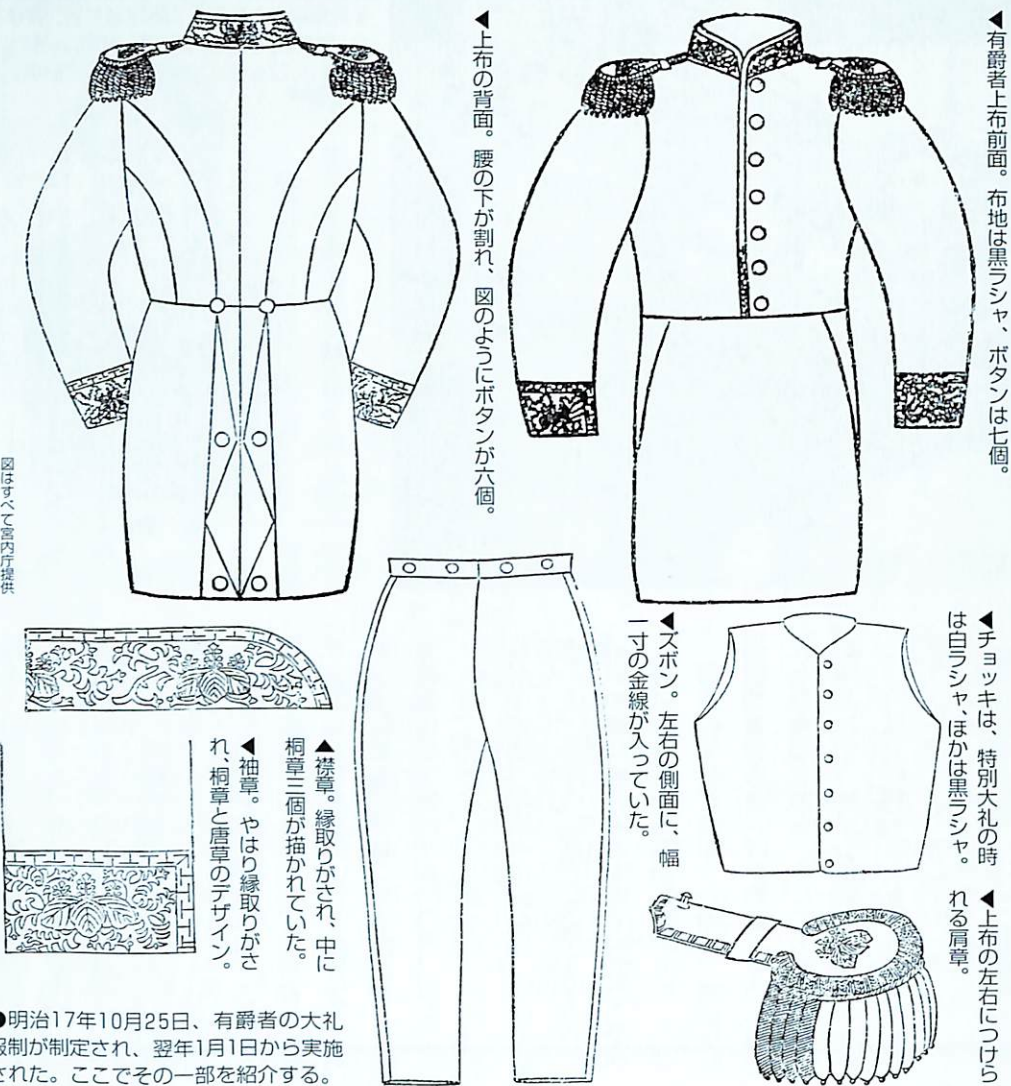
華族制度は、明治維新の翌年、明治二年に制定されたもので、従来の公卿、諸侯の四二七家を一括してひとつの階級にとりまとめたものである。だが、一〇〇万石の旧大守と、五万石の大名が同列では不都合だった。さらに維新の功労者も加えるべきだとの声があがり、明治一七年、華族に五段階の爵位が導入された。いわゆる「公侯伯子男」である。

爵位の序列の内規は伊藤と当時の右大臣・三条実美が決めた。原則的には、最上位の公爵は旧皇族、旧摂家（摂政・関

◀有爵者上布前面。布地は黒ラシャ、ボタンは七個。

◀上布の背面。腰の下が割れ、図のようにボタンが六個。

図はすべて宮内庁提供

◀チョッキは、特別大礼の時は白ラシャ、ほかは黒ラシャ。

◀ズボン。左右の側面に、幅一寸の金線が入っていた。

◀上布の左右につけられる肩章。

▲襟章。縁取りがされ、中に桐章三個が描かれていた。

◀袖章。やはり縁取りがされ、桐章と唐草のデザイン。

●明治17年10月25日、有爵者の大礼服制が制定され、翌年1月1日から実施された。ここでその一部を紹介する。

▲華族の親睦そのほかに大きな役割をはたした、当時の華族会館（旧・鹿鳴館）の正面。　日本建築学会提供

◀近衛家の人たち。同家は五摂家の筆頭で、篤麿(右から二人目)は、最初に公爵を受爵したひとり。左端は文麿(後の首相)。
近衛通隆提供

白資格のある家)、徳川本家など。侯爵には、旧清華家(太政大臣資格のある家)、徳川御三家、旧大藩藩主、伯爵は大納言級の公卿、徳川御三卿(田安、一橋、清水)、旧中藩藩主、子爵には旧小藩藩主が叙された。だが、これだけでは、公卿と諸侯以外に受爵が不可能となる。伊藤をはじめ維新の原動力で、新政府の中枢にあったのは、下級武士出身者たちである。そのため、爵位の選考基準に、「一新後勲功のあったもの」が加えられた。さらに、男爵の選考基準はたんに「一新後の勲功」とされた。

また、公卿出身の華族には、天皇の下賜金一九九万円を基金に、運用益を配分する制度が作られた。配分比率は公・侯、伯、子に対し、三対二対一の割で、年間支給額は公・侯が一八〇〇円、伯が一二〇〇円、子が六〇〇円だった。だが、それだけでは、華族の体面を保つには不足だった。しかも、事業に失敗するものや、詐欺被害にあうものも多く、「貧乏華族」と呼ばれるものも続出した。

男爵に支給がなかったのは、明治以降の成功者であり、財力のあるものが選ばれたためでもある。そして実際、爵位の条件として、後に(時期不明)、年間五〇〇円以上の利子収入を得られる資産を持つこと、が付け加えられた。

明治四〇年の改正「華族令」(全二八条)ではこれが手直しされ、当主だけでなくファミリー(継承者のいない場合の未亡人など、女性も含む)も爵位を名乗れるようになった。さらに爵位の生前相続、つまり爵位を持ったものの隠居も認められるよう改正されたのである。

## エリート育成としては大失敗だったシステム

「藩屏」の育成と同時に、爵位制にはもうひとつのねらいがあった。貴族院の議員として、衆議院のチェック役をはたし、天皇制の支柱となることである。公侯爵は、三〇歳で全員が終身貴族院議員(無給)となった。また、伯爵以下は、同じ爵位同士の互選で任期七年の議員を選出し、八〇〇円(後に三〇〇〇円)の歳費が支給された。

華族の中で、収入源にとぼしかった公卿にとって、貴族院議員の歳費は大きな魅力で、選挙のたびに「実弾」が飛ぶ激戦となった。

華族制度は、天皇制を支える選良たちに栄誉と特権を与えると同時に、その子弟たちを生まれながらのエリートとして育成するシステムのはずだった。たとえば、華族の二世は、成人すると「従五位」を授けられる。これは当時の軍隊内では連隊長(中佐級)に次ぐ位階だった。中には財にあかせて、私費の海外留学をするものもあった。周囲の羨望、やっかみを生み、軋轢が生じるのは当然だった。そしておおむね「育ち・血筋のよさ」は「ひ弱さ」をともなっていた。軍隊だけに限らない。政界や実業界でも、木戸幸一や、芸術家の後援者となったごく一部の例外をのぞいて、大成したものは少なかった。華族というシステムは一貫して〝期待〟を裏切り続けたのである。

それでも華族制は、昭和二二年、新憲法の成立まで存続した。

▶日露戦争の外債募集の功績によって、明治四〇年、男爵となった高橋是清。大正一〇年、首相に就任。
毎日新聞社

◀侯爵・前田利嗣の養嗣子で、後に陸軍大将となる利為と渼子夫人。
前田育徳会提供



**女たちの肖像**

# 「中村屋」女主人・相馬黒光 東京の本郷から新宿に進出 芸術家たちの溜まり場に!

稲葉真弓

芸術と文学をこよなく愛したパン屋の女主人・相馬黒光(三一=本名・良)の〝志〟をあますところなく反映させ、今に知られる老舗となった「中村屋」が新宿に登場したのが、この年の一二月のこと。当時、新宿はまだ馬糞の臭いの漂う場末の商店街だったが、黒光によると一目見て「ここだ、という天来の声を聞いた」そうだ。その彼女の〝予感〟はあたった。「新宿中村屋」はロシアチョコレート、松の実カステーラなど次々と新しい菓子を考案、同時に多くの芸術家の溜まり場となった。

黒光は、少女時代、「アンビシャス・ガール」とあだなをつけられたほど真っすぐで、きかん気の性格だった。明治九年、仙台生まれ。祖父は仙台藩士で儒学者、父は養子で会社勤めをしていた。幼少時から抜群に成績のよかった黒光は、高等科在学中、教会の日曜学校にかよったのがきっかけで洗礼を受け、二四年、仙台唯一のミッション・スクール、宮城女学校に入学したが級友の退学騒ぎに反発、一年で退学する。

▶おもな著書に、自伝『黙移』がある。
中村屋提供

明治二五年、東北地方のキリスト教布教で知られる押川方義の紹介で、横浜のフェリス女学校に入学。ここでも校風に失望し、二八年、退学。同年、長年憧れの明治女学校に入学した。在学中、いくつかの事件があった。新聞に彼女をモデルにした事実無根の中傷記事が出たこと、同郷の布施淡との恋の破綻などである。これらがきっかけとなり、三〇年、女学校卒業とともに信州・穂高で養蚕を研究していた相馬愛蔵と結婚した。二一歳の春だった。

が、閉鎖的な農村の暮らしは彼女にあわなかった。まもなく心身を病み、明治三四年秋、夫婦ともに上京。本郷の東大前に小さなパン屋を開業したのが、その年の師走だった。彼女が考案したクリームパン、ワッフルは飛ぶように売れた。六年後、新宿に支店を開業。これが後に新宿を代表する「中村屋」へと発展していったのである。

やがて、店には芸術家がたむろするようになった。彫刻家の荻原碌山(守衛)や中原悌二郎、詩人の高村光太郎。大正になってからはロシアの盲目の詩人・エロシェンコや、インド独立運動の志士、ビハリ・ボースらを保護し、長女・俊子をボースと結婚させたりした。名物の「カリー」は、このボースがもたらしたものである。

新宿文化発祥の地を作った〝パン屋のおかみさん〟は昭和三〇年、老人ホームで死去。夫・愛蔵の死の一年後のことだった。

**勝者・敗者**

# 入場料金は一等で六〇銭! 海外チームを招待した 慶応野球部、初の有料試合

阿部珠樹

アメリカ大リーグのシカゴ・カブスは、優勝にはあまり縁のない弱小球団として知られている。しかし、そんなカブスでも黄金時代はあった。今から約九〇年前、明治三九年から四一年にかけてである。この三年間、カブスはナショナル・リーグを制覇、ワールドシリーズでも四〇、四一年と連覇し、わが世の春を謳歌した。つまり、この頃はもう、アメリカではプロの試合というのが当たり前に行われていたのである。

ちょうどカブスが海の向こうで黄金時代を築いていた頃、すなわち明治四〇年、意外な試合がわが国で開かれた。意外な試合とは、観客から金を取って開かれる有料試合のことである。ちょっと待て、日本にプロ野球が生まれたのは昭和に入ってからではないのか。そんな疑問を抱く方もあるだろう。たしかにプロリーグの誕生は、昭和に入ってからである。したがって、この年、明治四〇年に開かれた有料試合は、プロ選手たちによるものではなかった。試合を行ったのは、慶応の学生だったのである。

前の年、早慶戦が中止になり、対戦相手に苦労していた慶応野球部は、ハワイのセントルイス野球団というチームを招いて試合を行うことになった。日本初の海外チーム招待試合である。しかし、セミプロ・チームを招くには、それなりに経費がかかる。そこで考え出されたのが、試合を一般に公開して入場料を取るやり方だった。入場料で招待費用を捻出しようとしたのである。料金は一等六〇銭、二等三〇銭、三等一〇銭であった。

試みは成功し、慶応は、遠来のチームに相応のギャラを払い、不快な思いをさせることはなかった。

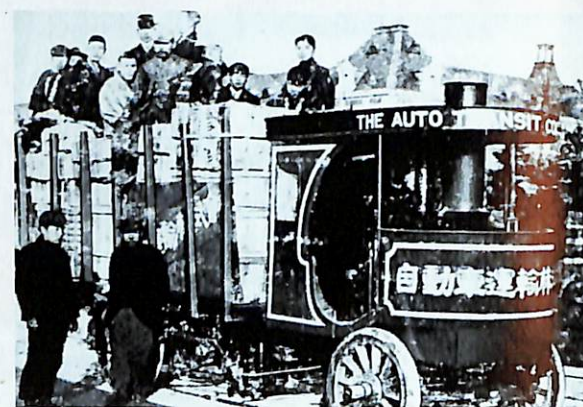
ちなみに試合の方は、慶応の五戦二勝。同じぐらいの力量の早稲田は三戦全敗だったから、もしかするとセントルイス野球団は、招聘元に遠慮して、二試合ほど花を持たせてくれたのかもしれない。いずれにしても、日本最初の有料試合が学生の手で行われたというのは、記憶しておいてよいことだろう。

▲初来日の外国野球チーム、ハワイのセントルイス野球団。
毎日新聞社

▲小林一三、新たな出発（1月）慶応義塾卒業後、三井銀行に入社したが、34歳で見切りをつけた。この年、箕面有馬電気軌道設立に参加、斬新な発想で大成功をおさめた。

▲乃木希典（57）、学習院院長に就任（1月31日）英傑とたたえられた陸軍大将が、華族の子弟に「尚武教育」。中等科・高等科に全寮制を敷き、起居をともにして指導。前列中央が乃木。

◀初の国産主力艦「筑波」完成（1月14日）大艦巨砲時代に備え、呉海軍工廠が自力で完成した装甲巡洋艦。排水量1万3750トン、30センチ主砲4門、副砲24門。

▼諏訪湖にスケート場新設（1月10日）東京の南商会と長野県下諏訪の有志が、約5万坪のリンクを造成。写真はスケートを楽しむ中学生。翌年には、ここで日本初の競技会が行われた。

▼「サロメ」公演禁止（1月26日）R・シュトラウスの傑作オペラに、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場理事が横槍。首を持った踊りが下品という理由だった。

「イリュストラシオン」

▼自動車運輸業、スタート（1月）東京自動車製作所が、輸入した蒸気自動車を貨物車に改造、「自動車運輸株式会社」と大書して走らせ、新時代をアピールした。

毎日新聞社

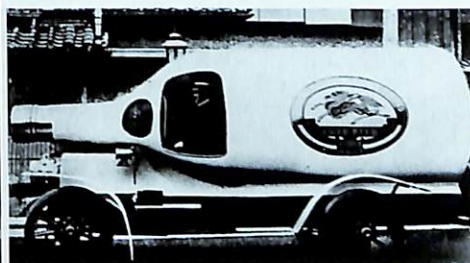
## 明治40年1月

1（火）●初の社会主義的女性雑誌「世界婦人」創刊。
2（水）●政教分離した仏が「教会法」を施行、国の、ミサの内容への干渉など認める。
3（木）●前年の手形交換高は、前々年の九億円増の三五億円、と新聞に。
4（金）●内務省、在米邦人発行の雑誌「革命」を発禁に。
5（土）●好景気を反映し、東京株式は好調、と新聞に。
6（日）●新年の万歳・獅子舞などで、金銭を強請するものは今年から厳重取締り、と新聞に。
7（月）●日英間の速達便は三週間で到着、と新聞に。
8（火）●韓国皇太子の成婚嘉礼使に、田中宮内相を任命（24日、漢城＝現・ソウルでの式典に参列）。
9（水）●横浜乗合自動車が営業許可を出願、と新聞に。
10（木）●東京の南商会、長野県に諏訪湖氷滑場を開場。
11（金）●横浜市に、神奈川女子師範学校創立。
12（土）●三菱造船所、船形試験水槽を新設・起工。
13（日）●各省の雇員の給料月額最高二〇円を、二五円に増額する閣議決定、と新聞に。
14（月）●国産初の装甲巡洋艦「筑波」が完成。
15（火）●幸徳秋水ら、日刊「平民新聞」を創刊。
16（水）●慶応義塾に初のホッケー倶楽部、と新聞に。
17（木）●漢字統一会が、日清韓共通の漢字大辞典を作る計画、と新聞に。
18（金）●大阪産の刷毛が品質のよさで輸出好調、輸出額は、年間一五〇万円、と新聞に。
19（土）●兵庫県の中央製糸女工三五人、病気退社の同僚を見送って罰金を科せられ、抗議のスト。
20（日）●スイス、政治と教会の分離を国民投票で否決。
21（月）●東京で株式暴落（日露戦争後の恐慌の発端）。
22（火）●インドネシアで大津波、一五〇〇人以上死亡。
23（水）●米、ハワイからの日本人移民を一部上陸拒否。
24（木）●上野動物園でライオンの妊娠を確認、初めての経験で対応に苦心、と新聞に（結局、流産）。
25（金）●独議会選挙。社会民主党が大幅に議席を減らし、帝国主義への道を踏み出す。
26（土）●東京勧業博覧会予定地で、室内温水プール（約七㍍×一五㍍）上棟式を挙行。
27（日）●大日本蚕糸会総会、東京の華族会館で生糸貿易一億円達成祝賀会を開催。
28（月）●露皇帝、満州（中国東北部）からの撤兵を宣言。
29（火）●警視庁、防火対策で長屋の構造を規制。
30（水）●米国・ワシントン州でも、労働連合協会が排日決議、と新聞に。排日運動拡大のきざし。
31（木）●乃木希典大将、学習院院長に就任。



ニュース・ファイル
# 1907
## フォト＋日録で再現する365日

夏目漱石が帝国大学を辞めて朝日新聞社に入社、森鷗外は軍医総監に昇進、文壇にも復帰した。不況、外債整理……、日露戦争の後始末に苦しみつつも、官吏の俸給が増額されるなど、日本は落ち着きを取り戻したかに見えた。しかしこの年、労働争議は明治期最高を記録する。

◀シマウマ水着、流行（7月）海水浴は明治中期に広まったが、女性は襦袢に腰巻き姿程度。それが、この頃には急激なさま変わりをした。東京近辺では逗子、稲毛、湘南などに海水浴場が開かれ、女性の進出も目立った。
毎日新聞社

キリンビール提供

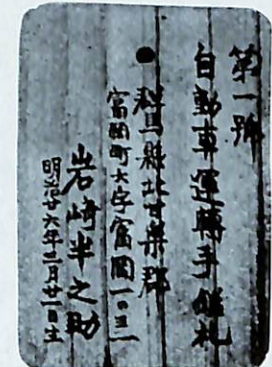
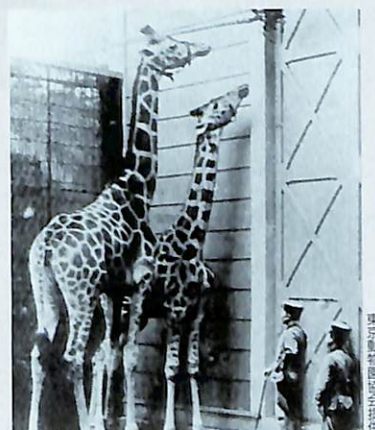
◀▲**麒麟麦酒設立（2月23日）**明治屋・三菱などが、明治2年創業の日本最古のビール会社を買収。左は本社工場、上はビール瓶をかたどった改造宣伝車。

▶**豊田佐吉に冬の時代（2月）**不況で、三井主導の豊田式織機会社に合理化の嵐、技術者の佐吉は苦しい立場に追いこまれた。2年後、退社し自立をめざす。

産業技術記念館提供

▼**警視庁、自動車取締規則を公布（2月19日）**営業車の増加にともなって、市中の制限速度時速8マイルなどを制定した。写真は、この頃使用された木製の運転免許証。

「警視庁百年の歩み」

東京動物園協会提供

▲**キリン初渡来（3月18日）**独・ハーゲンベック動物園から、オス・メス各1頭が上野動物園に到着。4月3日に公開され、その月の入園者が28万人を超す人気に。

▶**清国軍艦を日本で建造（2月）**川崎造船所が清国海軍の注文で、砲艦「楚謙」「楚泰」の2隻を完成、引き渡しが行われた。写真は、川崎造船所幹部と派遣された清国軍人。川崎造船所は、これで軍艦建造の実績を持った。

「太陽」

毎日新聞社

## 明治40年2月

1（金）●柳田国男・田山花袋・島崎藤村ら自然主義文学者、「イプセン会」を組織。

2（土）●東京盲人教育会が発会式。盲人の自立めざす。

3（日）●佐藤順一らが積雪期の富士山に登頂、測候所設置の可能性を実証した、と新聞に。

4（月）●足尾銅山で、坑夫がダイナマイトで見張り所爆破（6日、大暴動に。7日、軍隊が鎮圧）。

5（火）●幸徳秋水、「平民新聞」で直接行動を主張（後、田添鉄二が「議会政策論」を発表し批判）。

6（水）●生野銀山、三池炭坑でスト（この年、労働争議急増し、明治期最多の年間二四〇件を記録）。

7（木）●平民社、足尾銅山争議で家宅捜索受ける。

8（金）●米国、ドミニカと条約、関税管理権を獲得。

9（土）●甲府市の遊廓から出火、一二五四戸を類焼。

10（日）●横河民輔、横河橋梁製作所を創業。

11（月）●皇室典範増補、公布。新たに臣籍降下を規定。

12（火）●京都郵便局の集配員五三人、賃上げスト（19日、首謀者が治安警察法違反で有罪判決）。

●山梨県の小作一致会に解散命令、会員全員四〇〇人が土地復権同志会に加盟。

13（水）●英で、婦人参政権要求デモが議会に乱入。

14（木）●足尾銅山で九割近くが復職、平常に戻る。

15（金）●東京廃兵院、陸軍予備病院跡に開院。

16（土）●大阪女子体育会と神戸舞踊倶楽部の連合舞踏会は、風紀上弊害ありと教育界で論議を呼ぶ。

17（日）●早大・中大の中国人留学生三九人、中国革命党に関係しているとする清国の要求で退学処分。

18（月）●三菱長崎造船所のスト、成果なく結着。

19（火）●警視庁、自動車取締規則を制定。

20（水）●新橋－神戸間で、急行と同等の速さの郵便小荷物専用列車の運行を計画中、と新聞に。

21（木）●北海道幌内炭鉱で、坑夫が賃上げなど三一項目の要求掲げデモ行進、気勢あげる。

22（金）●米国・シアトルの在留邦人、日本人排斥問題で、日本政府による米政府への抗議要請を決議。

23（土）●米井源治郎・明治屋社長らが、ジャパン・ブリュワリーを買収し、「麒麟麦酒」を設立。

24（日）●故・海江田信義枢密顧問官家、異母兄弟が襲爵を法廷で争うお家騒動、と新聞に。

25（月）●大阪府立図書館、創立記念日で蔵書無料公開。

26（火）●ローマ・ウィーンの日本公使館、大使館に昇格。

27（水）●徳富蘆花、東京・千歳村（現・世田谷区）に隠棲。

28（木）●米大陸植民三〇〇年祭に参加のため、軍艦「筑波」と「千歳」が横浜港を出発。



### 証言・あの日この日
## 幸徳秋水（35）

**2月5日（火）**〈余は正直に告白する。余が社会主義運動の手段方針に関する意見は、一昨年の入獄当時より少しく変じ、さらに昨年の旅行において大いに変じ、いまや数年以前を顧みれば、われながらほとんど別人の感がある〉（幸徳秋水「余が思想の変化」）

この頃、逮捕・出獄を経て、病気療養を兼ねてアメリカに半年間遊学していた幸徳秋水は、読書や国際革命運動の知見から、思想的に大きく変身しつつあった。幸徳はアメリカから帰国するや、日本社会党主催の「帰国歓迎演説会」で、いち早く「議会主義」の無効を指摘、社会主義から無政府主義への転換を主張した。そして、この日、幸徳はさらに革命思想を徹底化させ、議会政策論から直接行動論への転換を宣言する。これは同志たちの間に、爆発的な大反響を巻き起こした。（山崎行太郎）

毎日新聞社

▲**目黒競馬場開場（3月）**日露戦争で国産馬の劣勢を知った政府が、増産・育成のため競馬を奨励。東京の目黒村に、全国の模範になる国営競馬場を建設した。昭和8年府中に移転、東京競馬場となる。

「写真画報」

▶**房総沖で米船遭難（3月3日）**シアトル－香港間を結ぶ太平洋航路最大の巨船「ダコタ号」（2万714トン）が、野島崎付近で座礁。乗客94人は無事だったが、船は沈没。写真は白浜海岸からの光景。

「写真画報」

▲**高橋是清、借り換えに奔走（3月）**日露戦争時、外債発行を成功させた日銀副総裁が、今度はその低利借り換え交渉。写真はニューヨーク財界の歓迎晩餐会。しかし、金融逼迫のため、米国は応じなかった。

「イリュストラシオン」

◀**フィンランドで女性議員19人誕生（3月15日）**帝政ロシアの圧制が続く中、前年、24歳以上の男女平等の婦人参政権を獲得、それに基づく比例代表制選挙が行われた。

▼**大阪でペスト大流行（3月）**世界的流行で、この年インドでは120万人が死亡した。大阪でも320人が死亡。幸い、翌年、急速に衰えた。写真は、完全防備の医師たち。

## 明治40年3月

1（金）●「時事新報」が創刊二五周年、新聞最多・一二四ページの記念号を発行。

2（土）●北海道・夕張炭坑の運搬夫七〇〇人がスト、三割の賃上げを要求。

3（日）●ハルビンに総領事館開設（10日、吉林にも）。

4（月）●政府、清国の要請で、滞日中の孫文を国外追放。

5（火）●韓国・仁川で大火、日本人家屋三七三戸含む四〇〇戸が焼失。

6（水）●清国の上海などで、飢民の米騒動が起きる。

7（木）●旭川で兵三七人、上官の虐待理由に同盟脱営。

8（金）●パリで電力スト、一日半停電。

9（土）●藤岡勝二、『国語研究法』を刊行。

10（日）●大阪商船、大阪－大連間に貨物の船車連絡システムを創設、運用開始。

11（月）●ブルガリア首相・ペトコフが暗殺される。

12（火）●鉄道庁発足、鉄道経営を逓信省から引き継ぐ。

13（水）●米国で、日本人学童の隔離命令廃止が決定。

14（木）●ニューヨーク株式市場が暴落。日露戦争による通貨過剰流出などで、米国に経済危機。

15（金）●樺太庁が発足。新領土が軍政から民政に移管。

16（土）●衆議院、女性の政治活動を認める治安警察法改正案を修正可決（27日、貴族院で否決）。

17（日）●「洋劇研究会」の荒川重秀らが、外国語による劇を近く公演、と新聞に。

18（月）●明治四〇年度予算公布。歳出総額約六億円。

19（火）●「癩（ハンセン病）予防に関する件」公布。患者届け出の義務化などを規定。

20（水）●東京勧業博覧会、開幕。入場料大人一〇銭。

21（木）●小学校令改正公布。義務教育年限を六年に。

22（金）●退役軍人が社会主義運動撲滅に動くと新聞に。

23（土）●仏とシャム（タイ）、治外法権修正などの協定に調印。

24（日）●東京の講道館で、改築落成式。

25（月）●愛知県、名古屋瓦斯にガス事業を許可。

26（火）●帝国議会、第二女子高等師範学校の設立地を奈良に決定（京都は一票差で敗れる）。

27（水）●山口孤剣、「平民新聞」掲載の「父母を蹴れ」で家族主義道徳を批判（後、起訴され有罪に）。

28（木）●郵便規則改正。はがき表面の通信文許可など。

29（金）●静岡の百三十八銀行東京支店支払い停止（この頃、関東・東海で取り付け騒ぎなどが頻発）。

30（土）●国庫出納事務での一銭未満切り捨てを決定。

31（日）●長野県上諏訪で、博徒一〇人が南信日日新聞社を襲う。同紙は半面白紙で発行。

「開国八十年史」

▲救世軍・ブース大将(78)、来日(4月16日)天皇が謁見、大隈重信・尾崎行雄らが歓迎するなど、「神の軍隊」の創立者に破格の待遇だった。写真は、東京・芝区愛宕町界隈を行く大将一行。

「帝国画報」

▲絢爛、白木屋呉服店(4月)東京勧業博に出演する芸妓衆の衣裳を担当して観客の目を奪った白木屋が、同時にその店頭も豪華に飾った。道行く婦人たちは、高尚・優美なディスプレーに、立ち去りがたい風情だった。

毎日新聞社

▲国産初のガソリン車完成(4月)米国帰りの技師・内山駒之助が、有栖川宮の注文を受けて製作、「タクリー号」と名づけた。12馬力、1837cc。写真は3号車で、翌年までに10台製作。

◀武者小路実篤ら、「十四日会」第1回会合(4月14日)毎月創作を読み合わせ、回覧雑誌「望野」を発行。左から、東京帝大在学中の同人4人、実篤、正親町公和、木下利玄、志賀直哉。

◀東京・神田で初の軍人会結成(4月9日)現役を退いた軍人800人余が集合。写真は、創立を靖国神社に報告する一行。陸軍が戦時の動員を容易にするため組織した、帝国在郷軍人会の先駆となった。

「時好」

◀三越呉服店は幻灯・映画会(4月6日)東京勧業博出展を記念して、毎週土曜日夜6時半から、駿河町の三井銀行前広場で、まだ珍しい映画を上映。毎回数千人が集まる人気となった。

## 明治40年4月

1(月)●百貨店となった三越呉服店に食堂誕生(洋菓子一〇銭、和菓子五銭、コーヒー五銭など)。
2(火)●長崎市で、小学校運動会の余興に女子生徒の「花魁道中」、父兄が激怒、と新聞に。
3(水)●東京でYMCA万国大会開催。二五ヵ国一八〇人と、国内から四五〇人参加。
4(木)●「帝国国防方針」「所用兵力」など裁可。
5(金)●シンガーミシンが月賦販売を開始、と新聞に。
6(土)●堺利彦と幸徳秋水が、路線の違いから平民社を退社(14日、「平民新聞」廃刊となる)。
7(日)●東京の玉川電鉄、渋谷—瀬田河原間全線開通。
8(月)●シャムに関する英仏協定調印。両国の勢力範囲を確定したうえで独立を承認。
9(火)●東京で、「神田区在郷軍人団」創立。初の在郷軍人組織で、約八〇〇人参加。
10(水)●文部省、官立医学専門学校の規定を制定。医学用外国語をドイツ語とするなど。
11(木)●氷が出まわり始める。天然・人造とも上出来で、相場は例年並みの一斤二銭、と新聞に。
12(金)●海軍、潜望鏡を潜水艦用兵器として採用。
13(土)●楽苑会歌劇大会。「ファウスト」など上演。
14(日)●メキシコで大地震、アカプルコは壊滅状態。
15(月)●初代渋谷天外、中島楽翁ら、京都で松竹専属の喜劇団を結成(楽天会の前身)。
16(火)●日本広告、韓国の漢城に支局開設。
17(水)●文部省、師範学校規定を公布。中学・高女卒業者の受け入れ態勢など細則を総合的に規定。
18(木)●ニカラグア・ホンジュラス間の戦争に米国が介入、一時停戦が成立。
19(金)●新潟—ウラジオストク間に定期航路開設。
20(土)●一六日来日の救世軍・ブース大将、天皇に謁見。
21(日)●陸軍が東京に電信大隊を設置、と新聞に。
22(月)●海軍、砲術学校・水雷学校など、練習所を学校と改称し、専門教育・研究の充実はかる。
23(火)●満鉄、調査部を設置。
24(水)●改正刑法公布(いわゆる明治刑法)。
25(木)●日本の人口は約四六七三万人と、内務省調査。
26(金)●樺太・海豹島のオットセイ・ラッコ猟を禁止。
27(土)●東京の第三連隊で現金が紛失、上官が兵士を疑い拷問・虐待、と新聞に。
28(日)●維新以来初めて、孔子祭を湯島聖堂で行う。
29(月)●農商務省、窮民対策として農家に養鶏を奨励。
30(火)●井原西鶴の小説全集、一二ヵ所の改定を条件に発禁が解除され、刊行の見こみ、と新聞に。



CORBIS-BETTMANN/PPS

▲ニューヨークにメーターつきタクシー登場(5月1日)パリから特別仕様車が入荷。19世紀末にドイツで始まったシステムが、米国にも上陸した。日本での始まりは、昭和13年になってからである。

▼聖ヨハネ教会堂、献堂(5月16日)1階が煉瓦造り、2階が木造、左右にロマネスク風八角塔という教会が、京都・河原町五条に登場。昭和38年、明治村に移築。重文。

毎日新聞社

◀6代目尾上菊五郎(21)、結婚(5月28日)新婦・やすさんは2歳上の元新橋芸者。菊五郎は2年前から東京・市村座で中村吉右衛門と競演、歌舞伎界の人気を二分し、後に「菊吉時代」と呼ばれる。

▼樺太で日露国境設定中(5月)ポーツマス条約で北緯50度以南の日本領有が決定。写真は、大島委員長以下画定委員が未踏の地に入り、境界線を測量しているところ。

「帝国画報」

▲夏目漱石(40)、朝日新聞に入社(5月)東京帝大講師を辞任、年俸800円では多忙に疲れて神経衰弱になるなどと、3日の新聞に「入社の辞」を発表。入社第1作は「虞美人草」だった。

「風俗画報」

▶靖国神社大祭に観覧車(5月)高さ18メートル。3月開幕の東京勧業博で設置されたものに次ぎ、日本で2番目。この大祭で、日露戦争関係の合祀者は累計8万5500人となった(後、3429人追加)。

## 明治40年5月

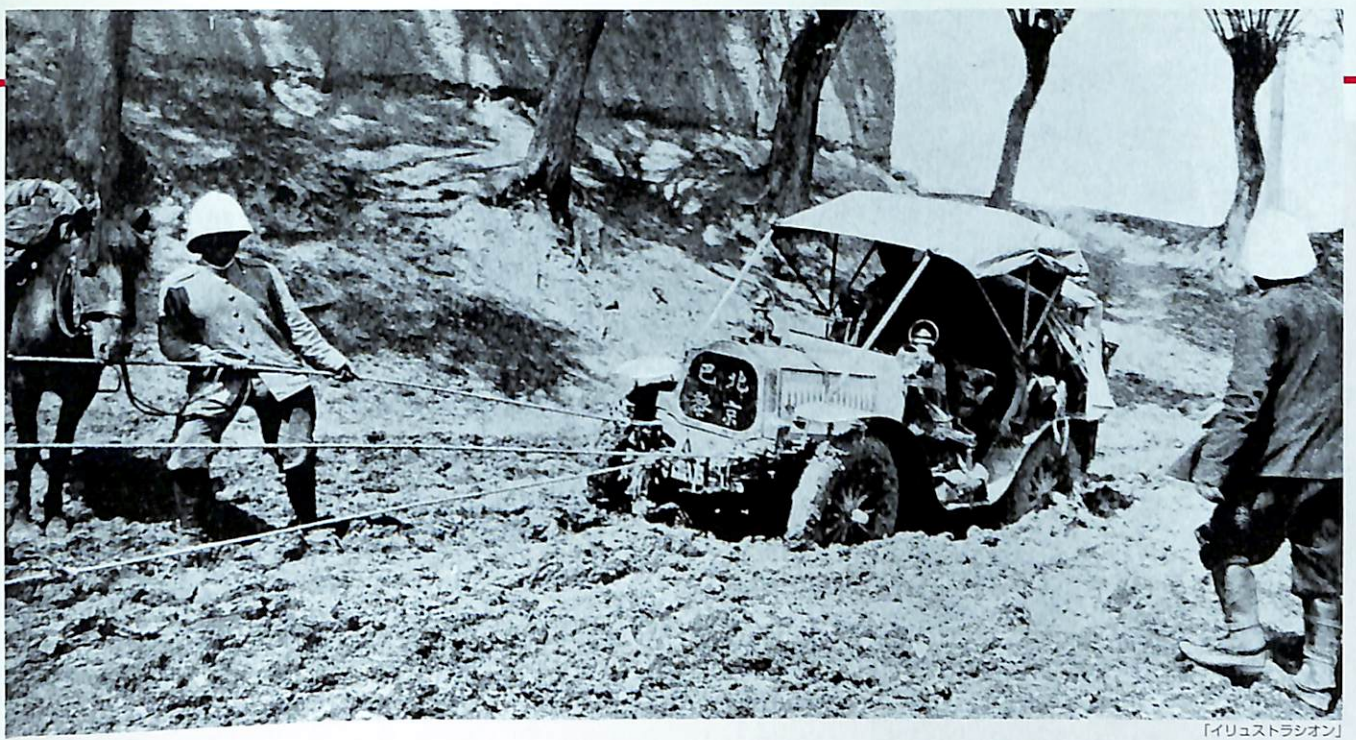
1(水)●ニューヨークにメーターつきタクシーが登場。
2(木)●三越呉服店大阪支店が開業。
3(金)●神田に東洋音楽学校(現・東京音大)が開校。
4(土)●日本生命保険、大連に代理店を設置。
5(日)●最近流行の立食式宴会の考案者は、文士劇グループ・若葉会のメンバー、と新聞に。
6(月)●大阪紡績(現・東洋紡)、天津に支店を設置。
7(火)●内務省、的中馬券の中からさらに抽選で高額賞金を支払う「ガラ札」禁止を通達。
8(水)●改正華族令公布。有爵者はすべて華族とする。
9(木)●米国のアンナ・ジャービスが「母の日」を提唱。
10(金)●札幌の缶工場から出火、三七〇戸焼失。
11(土)●独仏両国、知的所有権保護協定を締結。
12(日)●南仏のブドウ農家、加糖ワイン横行による値崩れに抗議し、大規模な抗議行動を開始。
13(月)●英で、第五回ロシア社会民主労働党大会。ボルシェビキ・メンシェビキの対立激化。
14(火)●スウェーデン議会、普通選挙法を可決。
15(水)●日本盲人会、東京で第一回総会を開催。
16(木)●英仏など、カルタヘナ条約に調印。独の進出に対抗し、地中海・大西洋の現状維持めざす。
17(金)●露の公共教育相、識字率は男性二九%、女性一三%と、学校不足を議会に報告。
18(土)●谷干城、板垣退助の「華族一代限り論」を、「個人を認めて家を認めない論」と批判。
19(日)●愛国婦人会が総会で兵卒を使役、非難起きる。
20(月)●小児に原因不明の突発性発熱が流行と新聞に。
21(火)●伊藤博文などの工作で、韓国の朴斉純内閣が総辞職(22日、親日派の李完用内閣が成立)。
22(水)●中国革命同盟会、広東省の黄岡で蜂起。
23(木)●横浜地方裁判所、海軍中将を姦通罪で拘引。
24(金)●一九〇四年調印の「病院船に関する条約」公布。
25(土)●米国で、初の二四時間自動車耐久レース開催。
26(日)●今年の扇子は花鳥山水の肉筆のものが流行、小売り三銭から六円、と新聞に。
27(月)●公立小学校教員の俸給改定。深刻な生活難への対応で、大都市では二四円を基準とする。
28(火)●婦人矯風会大阪支部、「婦人ホーム」を開設し、職業紹介・救済保護を開始。
29(水)●名古屋市の主力三銀行、同盟契約を結び、休業・不払い銀行の支援を決定。
30(木)●福井県の越前電気に、電灯事業が許可される。
31(金)●東京・丸ノ内に建設予定の中央停車場(現・東京駅)、初期計画を大幅に拡張、と新聞に。

◀**北京―パリ間自動車レース（6月10日）**仏紙「ル・マタン」が主催。参加5組中、イタリア車が60日後に1着でゴールした。写真は、途中のシベリアの泥道を馬に引かせて通過する参加車。

「イリュストラシオン」

毎日新聞社

▲**報知新聞社、キャデラックを購入（6月）**新聞社では初めて。報道の機敏、発送の迅速をめざし、1904年のニューヨーク自動車ショーで人気を博したアメリカ車に、白羽の矢を立てた。

▼**警視庁が変装実技講習会（6月）**捜査官の不足と政治犯偏重から、一般犯罪の検挙率は30パーセント弱。その挽回に必死だった。庶民になりすました刑事は市井に潜入、情報を収集した。

▶**谷中村、強制破壊（6月29日）**足尾銅山鉱害は洪水が原因とする政府が、渡良瀬川に遊水池設置を計画、その犠牲になった。写真は、破壊後も仮小屋を建てて抵抗する住民。

◀**北洋漁業スタート（6月4日）**堤商会（後の日魯漁業）の帆船が、サケを求めて新潟から北洋へ。写真は乗組員。中列左から二人目が創始者・堤清六。

ニチロ提供

▶**東北帝大、創設（6月22日）**札幌農学校を農科大学に昇格してスタート。4年後、仙台に理科大学が開設された。初代総長・沢柳政太郎。写真は農科大学正門。大正7年、北海道帝大開設で、その1学部となった。

北海道大学附属図書館所蔵

「警視庁百年の歩み」

## 明治40年6月

**1**（土）●横浜税関の港湾労働者一三〇〇人が賃金五割増を要求しスト（翌日、三割五分増で妥結）。

**2**（日）●片山潜ら議会政策派、「社会新聞」を創刊。

**3**（月）●露がシベリア移民を奨励、一五〇〇万人を移住させる計画、と新聞に。

**4**（火）●賃上げを要求した坑夫解雇をめぐり、別子銅山で暴動（6日、軍隊が出動し鎮圧）。

**5**（水）●足尾銅山事件の予審決定。一八〇人を起訴。

**6**（木）●英のインド担当大臣、「英国はいかなる場合もインドから手を引かない」と言明。

**7**（金）●桃中軒雲右衛門が、東京・本郷座で公演（一カ月間満員。浪花節の人気が急上昇）。

**8**（土）●伊沢修二の吃音矯正が効果を現す、と新聞に。

**9**（日）●東京米穀取引所理事長が、株暴落で旧藩主に大きな損害を与えた、と割腹自殺。

**10**（月）●リュミエール兄弟、新方式カラー写真を発表。

**11**（火）●福島県平町町会、学校建築費流用して遊廓設置決議、怒った住民は知事に陳情、と新聞に。

**12**（水）●東京の五月の電車事故死傷一八八人と新聞に。

**13**（木）●乙竹岩造、「万朝報」に北欧の性教育を紹介。

**14**（金）●ノルウェー議会、婦人普通選挙法案を否決。

**15**（土）●第二次ハーグ平和会議開催（～10月18日）。

**16**（日）●露で、ストルイピン首相が国会解散を強行。一九〇五年以来の「第一次革命」が終結。

**17**（月）●西園寺首相が、田山花袋・森鷗外など二〇人を招待（文展の審査員選考の根回し）。

**18**（火）●秋から配置する三八式野砲は、現在の三一式よりもすべての点で優秀、と新聞に。

**19**（水）●英国式の鉄亜鈴健康法が流行、と新聞に。

**20**（木）●日之出生命保険、最高保険金額一万円の、利つき養老保険を発売。

**21**（金）●沖縄で、電気事業計画が進んでいると新聞に。

**22**（土）●仙台に東北帝国大学を新設。札幌農学校を東北帝国大学農科大学とする。

**23**（日）●夏目漱石、「朝日新聞」に「虞美人草」連載開始。

**24**（月）●四〇年間教育一筋、私立広島高女校長の松岡みち子を帝国教育会が表彰、と新聞に。

**25**（火）●東京の泰明小学校、創立三〇周年祝賀会。

**26**（水）●東京・日本橋の鈴木銀行が休業。

**27**（木）●小売店が暴利あげる塩の値段を是正と新聞に。

**28**（金）●清国、遼陽など七カ所の開放を日本に通告。

**29**（土）●渡良瀬川遊水池建設に反対する栃木県谷中村（現・藤岡町）を強制取り壊し。

**30**（日）●株式は、過去半年間下落の一途、と新聞に。



「現場」を歩く

# 富士吉田

## 富士山“観光元年”から九〇年目に実施された地元活性策

山本徹美

▲浅間神社裏から登り始めて10分、「鳥居周辺遺構調査」の現場がある。鳥居を復元し、往時の活気を取り戻すねらいだ。　但馬一憲

明治四〇年八月一日午後三時、富士山の北麓に位置する山梨県・馬返（現・富士吉田市）で電話開通記念式が挙行された。式典には武田千代三郎山梨県知事（当時・四〇歳）ほか百余人が参列、武田知事は手ずから最終の電柱を立てた。

観光事業を最優先施策に掲げた武田知事は、富士山に注目。まず、登山道の整備と緊急連絡用の電話、救護所の設置などインフラ整備を手がける。この日開通した電話は、同知事が電柱を立てた場所（標高一四〇〇メートル）からさらに登山道を登った八合目（三三六〇メートル）に設置。『関東電信電話百年史』によると、馬返から五合目（二三〇五メートル）までは「生木に埋込碍子をとりつけ、一一番線を張り、五合目以上は腕金を合わせたものを鉄塔代わりに使用」して電話線を引いた。

一方、吉田口登山道の拡幅工事も完了。「五合目迄の登山行路は殊の外美事に出来し、吉田浅間神社裏より同所へ駄馬にて約二時間半」（「報知新聞」）

従来、一合目の手前にある馬返から先は峻険で幅員も狭く、その名のとおり、馬を返して徒歩で登っていた。それが馬でも登れるようになったのである。こうして年間五〇〇〇人程度だった登山者は二万人に急増。まさに富士山の“観光元年”となった。

### 富士登山の原点に帰る

馬返を訪ねてみる。登山道を入ると発掘現場があった。平成八年から文化庁と富士吉田市教育委員会が進めている「歴史の道（富士吉田口登山道）整備活用推進事業」のひとつ、「鳥居周辺遺構調査」である。明治四〇年頃にはここに石灯籠が二対と鳥居があったという。

「鳥居は一部消失し、復元を予定しています。この事業によって往時の活気を取り戻せたら、と期待をかけ、取り組んでいます」（同教育委員会・森屋茂正氏）

昭和三九年、河口湖と五合目を結ぶ有料道路「富士スバルライン」が開通。「ハイヒールで富士山へ」と観光客は河口湖町へと流れ、富士吉田市から遠のく。

富士吉田市では、観光客を取り戻そうと、知恵をしぼっている。平成一〇年六月二六日から七月二日にかけて、江戸時代の富士講を再現した「富士道あんぎゃ」を企画。参加希望者約四〇〇人から一七人を抽選。富士吉田市の職員など総勢三〇人は、東京・日本橋から白装束をまとい、徒歩で富士山登頂をはたした。参加した堀内真氏（同市教育委員会）の感想。

「室町時代以来の登山道が残っているのはここだけ。日本人の山登りの原点、山岳信仰に思いをはせながら登るのも楽しいものですよ」

私も登ってみた。道端に石碑が立ち、ところどころ石畳が現れるのも「歴史の道」ならでは。馬返から森林の中にあって山容はまったくつかめなかったが、五合目で初めて山頂を目にする。えも言われぬ感動であった。

富士吉田市提供

▲明治末年の富士登山風景。まだこの頃は、富士登拝がさかんで、白装束で「六根清浄」と唱えながら、集団登拝する光景がよく見られた。

ベストセラー

# 『坊っちゃん』ほかを収録 夏目漱石の『鶉籠』刊行！

この年の初めに夏目漱石の作品集『鶉籠』が刊行され、話題を呼んだ。「坊っちゃん」「二百十日」「草枕」の三篇が収録されており、漱石みずから自信を持って送りだした作品集だった。その序文には、次のように記されている。「文章は趣味を生命とす。文章にして趣味なきは天日の冷やかなるが如し。卒然として存在の価値を失す。……『鶉籠』（を公刊するの）は天下青年の趣味をして一厘だに堕落せしむるの虞なき作品たるを信じたればなり」と。

中でも「坊っちゃん」は、単身赴任の若い中学校教師を主人公として、その周囲に日本人の典型的人物像を配する絶妙の構成と、ユーモラスな会話にあふれた軽快な展開もあって、後々まで幅広い層に支持される作品となった。今でも代表的な青春小説のひとつとされている。

同じ年の四月、後に童話・童謡運動の中心に位置するようになる鈴木三重吉の作品集、『千代紙』が刊行された。これには処女作「千鳥」も収録されている。「千鳥」は「千鳥の話は馬喰の娘のお長で始まる……洋服で丘を上ッて来たのは自分である。お長は例の泣き出しさうな目許で自分を仰ぐ」といった、短いセンテンスをつらねる独特の文体を駆使して永遠の女性像を描き出した。なお、この作品は漱石に献じられていた。

また八月には、二葉亭四迷が、「東京朝日新聞」に連載していた小説『其面影』を上梓した。もともとは日露戦争による戦争未亡人問題をテーマにした新聞小説を書くはずだったが、実際には、不幸な生まれの女性を登場させ、その女性と不倫の恋におちいりながらも、優柔不断なところのある青年を主人公にした、自己批判的作品になった。

◀『鶉籠』（春陽堂、12銭）

▲『其面影』（春陽堂、70銭）

◀『千代紙』（俳書堂、75銭）

日本近代文学館提供（3点とも）

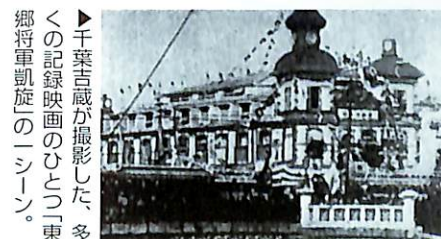
スターと名場面

# 坪内逍遙訳「ハムレット」 文芸協会、本郷座で初演

前年発足した「文芸協会」は、第一回公演からまる一年経ったこの年一一月、第二回公演を本郷座で持った。この時の演し物はシェークスピア作・坪内逍遙訳の「ハムレット」だったが、部分的に坪内逍遙自身も演出にかかわり、役者の台詞まわしや所作を日本人のものに変え、作品を日本版ハムレットにした。しかし、全面的・本格的に坪内逍遙が演出し、独自の「ハムレット」を舞台で打ち立てるには明治四四年まで待たなければならなかった。

また、映画すなわち活動写真の方では、明治三六年に常設館となった浅草・電気館以来の活動写真常設館がこの年、次々にオープンする。大阪でも千日前電気館が常設館として誕生した。活動写真はいよいよ大衆娯楽として定着するきざしを見せてきたのである。

上映されたのは、もっぱら輸入短編映画だったが、日露戦争の実写を機に日本での製作もさかんになってきて、撮影技術も向上してきた。カメラマンとして今に名を残す千葉吉蔵はその代表的存在だった。千葉は、それまでのカメラマンが定点からの撮影を常識としていたのに対して、活動写真は動くところに特徴があるのだからと、みずから動きまわって撮影し、周囲を驚かせた。日本にも、映画製作の積極的な動きが生まれていたのである。

▲文芸協会の「ハムレット」。写真は明治44年の舞台。

▶千葉吉蔵が撮影した、多くの記録映画のひとつ「東郷将軍凱旋」の一シーン。

▲先駆的な映画カメラマン、千葉吉蔵。

モノ語り'07

# 輸入品と国産品が拮抗！ 懐中時計「エキセレント」、自転車「ホドソン号」や「赤玉ポートワイン」

◀まだ未熟な製品だった懐中時計 精工舎（現・セイコー）で明治33年から製造されていた銀製の懐中時計「エキセレント」が、この年、恩賜品に指定された。アメリカのウォルサム・ローヤルという時計を手本に作られたもので、ゼンマイや文字盤などの部品は輸入品を使用したが、仕上がりは手本におよばなかった。しかし、高級懐中時計製造のノウハウは、このような方法で蓄積されていったのである。

セイコー時計資料館蔵／田代眞一

▲輸入自転車が大活躍していた ラーヂ自転車で名をはせた日米商店が、イギリスから輸入して販売した自転車「ホドソン号」が、高級実用車として人気を集めた。イギリスでは郵便車として広く利用され、その丈夫さと低価格とで好評を得ていた。日米商店が当時販売した自転車としては、ほかに「ケント号」などもよく知られていた。

自転車文化センター蔵／楠田守

▲サイダーの定番が作られた 現在でも販売されている、清涼飲料水「三ツ矢サイダー」のルーツである「三ツ矢印平野シャンペンサイダー」が、この年、帝国鉱泉から1本10銭で発売された。当時から、年間160万ダースを生産するほどの巨大市場を作りだしていた。昭和2年からは大日本麦酒（現・アサヒビール）で生産・販売されるようになり、「三ツ矢サイダー」の名で親しまれる。

▲暗闇に映し出される映像を楽しんだ 映画の普及が近づいていたこの年、島津製作所は手軽に映像を楽しめる装置、灯油式の「幻灯機」を製造・販売した。当時、すでに電気を光源とすることは可能だったが、現在のようにどこにでもコンセントがあるという時代ではなかったから、灯油を光源にした方が持ち運び用としては便利だったのである。 島津創業記念資料館蔵／石井美雄

▲競馬が超高価なギャンブルだった時代 この頃、ギャンブルとしての競馬が政府黙認とされ、全国で馬券を販売する競馬が開催されるようになった。しかし公務員の初任給が50円の時代に、入場料2〜4円、馬券は5円と高価な娯楽だったから、競馬を楽しめるのはごく一部の裕福な人たちだった。写真は、この頃、東京・池上競馬場で売られていた馬券。

馬の博物館提供

▶国産ワインが市場に登場した この年、寿屋洋酒店（現・サントリー）から、初の本格的国産ワイン、「赤玉ポートワイン」が発売された。創業者・鳥井信治郎は、明治32年に鳥井商店を開業、輸入ワインや缶詰類を扱っていたが、スペイン産葡萄酒を日本人向けに味つけした「向獅子印甘味葡萄酒」を開発し、明治39年には「寿屋洋酒店」の看板を掲げた。その後も日本人向けに改良を重ね、ついにこの年誕生したのが「赤玉ポートワイン」だったのである。

## 「日本一の大バクチ」

日露戦争後、軍馬の重要性と、西洋の軍馬に比べて日本の軍馬が劣っているという議論がさかんになり、〝優れた馬を育てるには競馬が一番〟という気運が高まっていた。そんな世論を背景として、政府は明治39年に、ギャンブルとしての競馬の開催を黙認し、全国各地で競馬が行われるようになった。

政府公認の、しかも上流階級だけが楽しむバクチだったわけで、「日本一の大バクチ」と揶揄された。しかし馬券にかかわる不正行為も目立ち、明治41年、政府は再び禁止せざるをえなかった。写真は、横浜の根岸競馬場における着順表示塔周辺のにぎわい。

馬の博物館提供

人物クローズアップ

# 桃中軒雲右衛門（三三）

## 本郷座で「義士銘々伝」口演 浪花節を“大舞台”の芸に！

九州に桃中軒雲右衛門あり。すでに並ぶものなき存在として、九州一円にその名をはせた浪曲師・桃中軒雲右衛門（三三）が、念願の上京をはたすべく、九州を出発したのがこの年、明治四〇年の三月。途中、京都、大阪でもその芸名を高めて、いよいよ東京での興行にのぞんだのは、明治四〇年六月七日のことだった。

舞台は本郷座。二ツ巴の定紋を打った、金襴の覆いがかかる演台の後ろに、何双かの金屛風をつらね、舞台の上手と下手には緑の松が飾られている。登場した雲右衛門は、紋付・羽織・袴に、髪は総髪。

▲雲右衛門のレコードが初めて発売されたのは、明治45年5月19日だった。値段は1枚3円80銭。

イサミ堂提供

いかにも国士風のいでたちである。

前口上はいっさいなし。客席へのお辞儀とともに曲師の三味線が響き、始まったのは「義士銘々伝」の語りだった。この演目は、九州時代に大好評を博し、雲右衛門を一躍、九州一の浪曲師にしたものだったが、東京でも大いに喝采をあび、日露戦争後の戦勝気分とあいまって、一日三席、一ヵ月間の口演は連日満員の大盛況となった。浪曲と言えば、低俗な門付け芸としてさげすまれた時代。雲右衛門はそれを、大舞台で演じる芸に押し上げ、紳士淑女もじっくりと聞きほれる芸に仕立てあげたのである。

▶雲右衛門の口演も出版され、人気を集めた。写真は明治四一年二月刊の『雲の曙義士銘々伝』。

布目英一／木馬亭提供

桃中軒雲右衛門は、明治六年一〇月二五日、群馬県群馬郡高崎（現・高崎市）生まれ。本名は山本幸蔵（岡本峰吉とも）。父は吉川繁吉の芸名を持つ祭文語りで、雲右衛門はその次男である。父の繁吉は、合三味線の母親・ツルとともに、祭文語りをしながら関東一円を流して歩いた。幸蔵が吉川小繁の名で旅まわりをするようになったのは、七歳の時である。

寄席への初舞台は、明治二三年二月。美声と快調な節まわしが評判で、二九年一〇月には二代目吉川繁吉を襲名した。

幸蔵の転機は、東京の三河屋梅車一座に入った時から始まる。梅車の女房で、三味線の名手だったお浜とただならぬ仲になった幸蔵が、お浜と一緒に出奔。その逃避行の途中、桃中軒雲右衛門と名を改めた幸蔵は、明治三五年三月、中国革命の後援者、宮崎滔天（当時・三一歳）の知遇を得る。

明治三六年六月、雲右衛門は滔天の勧めで九州に赴いた。ここで雲右衛門が手がけたのが「義士銘々伝」である。この頃の日本は、もはやロシアとの衝突が避けられない状況にあった。そのため、武士道鼓吹を掲げる滔天が、武士道の鑑として選んだこの演目は、知り合いの新聞記者たちが台本に手を入れたもので、これに武士道を好む九州という土地柄も加わり、雲右衛門を一躍有名な存在に押し上げたのである。

▲仲間との記念撮影。右から二人目が雲右衛門。4人目が、彼の九州行きを援助した宮崎滔天。

布目英一／木馬亭提供

本郷座での大成功の後、雲右衛門は全国各地の舞台で口演を重ねた。

浪曲研究家の布目英一氏は、雲右衛門の魅力と功績を、こう語る。

「雲右衛門の声は、人々の肚の中にしみ入り、恍惚とした気分にさせたのでしょう。そして、壮士の演説のような舞台演出。こうしたものが、人々がそれまで低俗なものとして軽蔑していた浪花節を、国民すべてのものにしたのではないでしょうか」

雲右衛門はレコードの吹きこみも手がけ、日本一の浪曲師の名をほしいままにしたが、大正五年一一月七日、肺結核で極貧のうちに死去。四三歳だった。

▶それまでは“低俗”だとされていた浪曲を、大劇場の舞台に乗せ、社会的に高めた雲右衛門の功績は大きい。彼の後に続いたものも多く、弟子に桃中軒白雲・巴右衛門などがいる。

布目英一／木馬亭提供

## 決定的瞬間

# 画期的なカラー写真登場！仏のリュミエール兄弟が「オートクローム乾板」発売

「あの二人の兄弟が近々、画期的な天然色の写真機を発売するらしい」

一九〇七年初夏、フランスでは、こうした噂が飛びかっていた。

「あの二人の兄弟」とは、フランス・リヨンの街で著名な写真乾板会社を経営するオーギュスト・リュミエール（四五）、ルイ・リュミエール（四二）のことである。彼らは、経営者であると同時に、フランス最先端の〝ハイテク〟技術者でもあった。

彼らは、世界初のスクリーンに映し出す映写機「シネマトグラフ」の発明者である。一八九五年一二月二八日、パリ・オペラ座にあるグランカフェで行われた世界初の有料映写会は、同国内はおろか世界中をアッと言わせた。彼らの発明によって、パリをはじめ世界の各都市で映画の興行が始まったのである。そして、映画の原点は、かの発明王、米国のエジソンの「キネトスコープ」ではなく、リュミエール兄弟の「シネマトグラフ」であるという評価はフランスの誇りにもなっていた。

それだけに、二人が開発したカラー写真機の発表の噂に、いやがうえにも期待は膨らんだのである。

噂どおり、同年六月一〇日、二人は「オートクローム乾板」の開発を発表し、即座に販売を開始する。そのくっきりとした美しいカラー画像は、人々の期待を裏切ることはなかった。それどころか、人人は初めて実用的なカラー写真技術が登場したとして、その快挙に賞讃の声を贈ったのである。

カラー写真は、すでに一八九〇年代に実現していた。とはいえ、その当時のカラー写真は幻灯機でしか再現できず、画質も貧弱で、しかも工程が複雑で高度な技術が要求されたため、モノクロ写真のように写真技師が取り扱えるほどの実用レベルにはいたってはいなかった。

二〇世紀に入って数年を経た頃、欧米諸国では新しいタイプのカラー写真技術が相次いで発表されている。そのベースとなる、さまざまな発見・発明が出そろい、また優秀な色素や感光材料が開発される。こうした技術成果が引き金となって、カラー写真技術の開発が活発化した。リュミエール兄弟の「オートクローム乾板」もそうした成果のひとつであった。

多数のライバル商品を蹴落として、「オートクローム乾板」に軍配があがったのも、また、写真の歴史の重要なエポックとして名をとどめることになったのも、ひとえに、その中にこめられた画期的なアイディアにある。

そのアイディアとは、三原色の細かなフィルターが散りばめられたモザイクスクリーンを用いるという点だった。

リュミエール兄弟が発明した「オートクローム乾板」写真は、今日のカラー写真のように光の三原色の原理を利用して、被写体の色をいくつかの色に分解して写した後、合成してもとの色を再現する「間接法」と呼ばれる手法をとる。

この原理を用いるのはほかのライバル製品も同じだが、それらは被写体の色味を三原色ごとに別々の乾板に分解して撮影し、それを合成してカラー写真を得るという方法をとっていた。これに対し、「オートクローム乾板」は、モザイクスクリーンを利用することで、一枚の乾板でカラー写真を作る方法を実現させたのである。このモザイクスクリーンにより、撮影や現像などの作業は大幅に簡単になり、カラー写真製作の簡便さは、ほかのカラー写真技術に比べ、際立って優れたものになった。

「オートクローム乾板」写真は、当時、最も感度の高い黒白感光材料に比べれば約六〇倍もの露出時間を必要としたものの、その画期的なアイディアで商業・芸術写真などの分野を中心に世界中に普及し、「シネマトグラフ」に続くヒット商品として名をつらねることになる。

そして「オートクローム」は、一九三五年に米国のイーストマン・コダック社が開発した多層式カラーフィルム「コダクローム」が登場するまで、カラー写真の代名詞となるほどポピュラーな方式として君臨することになった。

イーストマン・コダック社の創始者、ジョージ・イーストマンは、「コダクローム」開発の十数年前、「オートクローム」に代わる画期的なカラー写真方式が発明されないことに業を煮やして、より簡単明瞭で、より美しい方式を発明したものに、その権利の譲渡と引き替えに一〇〇万ドルを贈呈するという内容の懸賞金をかけたと伝えられている。

これは、彼がリュミエール兄弟の「オートクローム」をライバルとして強く意識し、それを超えるカラー写真技術の開発にいかに執念を燃やしたかを伝えるエピソードであるとともに、「オートクローム乾板」の完成度と人気の高さを如実にものがたるものでもあった。

◀リュミエール兄弟の「オートクローム乾板」による、初期のカラー写真。急速に普及し、広告写真・芸術写真などで広く利用された。

PPS

▲リュミエール兄弟。左が兄のオーギュスト。右がルイ。二人はシネマトグラフを開発、「映画の父」としても知られる。

SIPA・PRESS／オリオン・プレス

美の出会い

# 新人・和田三造に一等賞！ “猫も杓子も”見物に行った初の官展「文展」の功罪

明治四〇年一〇月二五日から一一月三〇日まで、東京・上野公園内の東京勧業博覧会美術館で、第一回文部省美術展覧会、通称「文展」が開催された。後に「帝展」「新文展」と名称は変わり、昭和二一年からは日本美術展覧会、通称「日展」となり、今日にいたる官主催の公募美術展の始まりである。

初の「文展」への応募作品数は、日本画六三五点、西洋画三二九点、彫刻四六点の総計一〇一〇点。そのうち入選展示された作品は、審査委員の出品も含め日本画九九点、西洋画九一点、彫刻一六点の総計二〇六点だった。新聞・雑誌はこぞって作品評を載せたが、中でも最も話題を呼んだのは、西洋画でただ一人、最高の二等賞となった新人・和田三造（二四）の大作「南風」である。この絵について、審査委員の一人である画家の中村不折（四一）は、総合雑誌「太陽」一二月号に談話を寄せている。

「随分評判の高い絵であるが、同時に欠点も沢山ある。（中略）海と人物が別物だという批難が最も多い。だが、仲々骨を折ったもので、その骨折と、強い覇気のある所は人目を惹くに足りる」

ロマンチックなタイトルとたくましい漁夫、太陽の光に満ちた海という強い画面は、日露戦争に勝利した高揚した気分と重なり、多くの人々の共感を呼んだのだろう。和田は「南風」で一躍名をあげ、文展史上でも後々の語り種となるデビューをはたした。

第一回「文展」は大評判となり、入場者は四万人を超えた。この時の様子を水彩画家の三宅克己は後に回想している。

「この催は意外の人気を得て、絵に趣味の有無を問わず、猫も杓子も争って見物に押し掛けた。八百屋の御用聞きの小僧さんから雑巾がけで手に皹をきらす女中まで、文展の噂が出来ないものは、仲間外れとされる程の勢いであった」（『思い出づるまま』昭和一三年刊）

この記述はいささか大げさではあるが、以後、「文展」は回を重ねるごとに注目をあび、第六回展の入場者は一六万人に達する。この「文展」の大成功は、画家たちにも大きな影響を与えた。前出の三宅は続けて「私どもは生命懸けで作画をして文展に出品したものである」「一般洋画家の死活戦は、出品を試み入選否やとの勝負であった」とも書いている。

「文展」の発足は、前年の明治三九年、西園寺内閣の文部大臣に牧野伸顕（当時・四四歳）が就任したことに始まる。当時、官の美術展は農商務省などが主催する勧業博覧会に場を与えられていただけである。かつてオーストリア公使をしていた牧野は、こうした日本の事情を憂えて、美術を文教政策の一環としてフランスの官設サロンのように開催すべきだと考えていたのである。大臣就任とともに、牧野は同じ考えの東京美術学校校長・正木直彦（当時・四四歳）、同校教授・黒田清輝（当時・四〇歳）、友人の岡倉天心（当時・四三歳）らに進言を求め、文部省美術展覧会の開設を決断した。

しかし、画壇には日本画・洋画ともにさまざまな団体やグループが存在し、旧派・新派と色分けされていたので、審査委員の人選に苦心した。四〇年八月一三日に内閣から任命された審査委員は、東京派、京都派、白馬会などの新派、太平洋画会など旧派に学識経験者をまじえてバランスをとったほどである。まだ画家の数も少なかった西洋画は一応のまとまりをみたが、日本画では新派にかたよりすぎるとの反発が旧派から出されて、旧派の出品拒否という事態にも発展した。こうした騒動はその後も続き、明治末年から大正期にかけてヨーロッパに留学していた画家たちが続々と帰国してくると、“文展アカデミズム”に対する反発は激しくなっていく。

こうした「文展」の内実を、美術評論家の瀬木慎一氏は次のように位置づける。

「芸術家や芸術活動を奨励しようという『文展』の趣旨はよかったのだが、権威を後ろ盾にして教育界と強く結びつき、現実から離れてしまった。青木繁のような新しい才能が、『文展』落選でずたずたにされる悲劇を生んだ。結局、日本画では横山大観らの『院展』グループが離れ、西洋画では新しい西洋美術に影響を受けた二科会が生まれてくることになる」

東京国立近代美術館蔵

▲第1回「文展」を代表する作品のひとつ、下村観山「木の間の秋」。明治40年。二曲一双、紙本着色、各170×170センチ。自然をモチーフとした気品ある装飾性が話題となり、人気を集めた。観山は明治38年、留学先の欧州から帰国、第1回「文展」の審査員をつとめていた。

東京国立近代美術館蔵

▲和田三造「南風」。明治40年。油彩、151.5×182.4センチ。八丈島への船旅の途中、荒天にあって漂流した体験をもとに、和田はこれを描いた。「南風」に最高賞が与えられたことは、若い画家たちを大いに刺激した。

▲第1回「文展」西洋画部審査員たち。前列左から岩村透、中村不折、正木直彦、塚本靖、森鷗外、後列左から久米桂一郎、和田英作、一人おいて岡田三郎助、満谷国四郎、松岡寿。

20世紀博物館

# 舞鶴市立赤れんが博物館

## “日露緊迫”の中で建てられた鉄骨煉瓦造り建物と“由緒”ある展示品

京都・舞鶴市

桑原茂夫

舞鶴というと“引揚げ船”が着く港として、深く記憶に刻みこまれていたが、実際に歩いてみると、赤煉瓦の大きな建物が目立つ静かな港町であった。

平成五年にオープンした「舞鶴市立赤れんが博物館」は、その一角にある。赤煉瓦造りのがっちりした建物で、もともとは明治三六年、日露関係が緊迫の度を強くしていく中、海軍兵器廠魚形水雷庫として建てられた。魚雷の格納庫である。それだけに頑丈さが要求されて、鉄筋コンクリートならぬ“鉄骨煉瓦造り”で設計・施工された。この工法の建物としては、国内で最も古いのではないかと目されている。

今でも、二階に行って天井を見上げると鉄の骨格がそのまま見られるし、この鉄骨がアメリカのカーネギー社製のものであることを、そのロゴから知ることができる。日本の製鉄技術がまだ熟していなかった時代を、まざまざと映し出した建物でもあるわけだ。

それ自体、博物館におさめられてもおかしくない、由緒あるこの建物の中に、さらに由緒ある煉瓦が世界中から集められ、展示されている。

モヘンジョ・ダロの煉瓦から、メソポタミアの神殿の煉瓦、万里の長城の煉瓦、イギリスはハンプトン・コート宮殿の煉瓦、アウシュビッツ収容所の煉瓦、ベルリンの壁だった煉瓦、日本の奈良時代に用いられていた煉瓦、旧帝国ホテルの煉瓦、原爆ドームの煉瓦など、枚挙にいとまがないが、どれも実物であるところに価値がある。それぞれ舞鶴市の職員が、現地を訪れて入手したり、先方やコレクターから寄贈されたりしたもので、ひとつひとつに入手のストーリーが秘められた展示物なのである。

もともと煉瓦は、粘土を天日で乾して固める素朴な製法から始まった建築素材であるだけに、大昔から世界各地で使われてきた。したがって、展示も驚くほど幅広い時代と地域を網羅している。

市の職員で、この博物館の創設を機に煉瓦の研究に取り組み、今やその道の専門家になった観のある小東幸夫さんによると、日本は世界でも最も煉瓦造りの建物が少ない地域のひとつなのではないかということだ。明治時代に新しい都市空間として建設され、まさにワンダーランドを現実のものとした“銀座煉瓦街”も、大正一二年の関東大震災でもろくも崩れ落ち、はかない夢のような空間でしかなかった。地震の多い地域に煉瓦という素材はなじみにくいのだ。

ところで、この「赤れんが博物館」は世界でおそらく初めての“煉瓦専門博物館”なのである。煉瓦の建物がどこででも見られる地域では、なかなか思いつかない博物館だったのかもしれない。皮肉な事実ではあるが、日本では煉瓦が珍しい分、博物館の中は生き生きとした空間になっているように思えた。

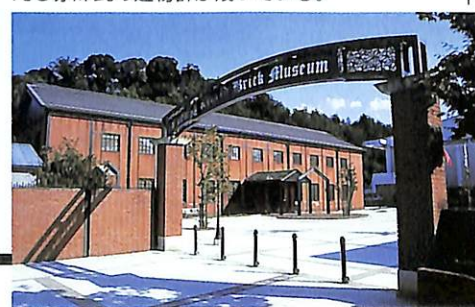
▶近代において煉瓦の大量生産を可能にしたホフマン窯。日本には、四カ所に現存している。

舞鶴市立赤れんが博物館提供（4点とも）

▲メソポタミアの神殿を構成していた煉瓦の実物も、展示されている。

▲1階の展示風景。写真左側の壁に、当時の鉄骨が見える。また、現在の床材の下に当時の煉瓦床がそのまま残っており、部分的にそれを見ることもできる。

▼「赤れんが博物館」の外観。明治34年に海軍舞鶴鎮守府の開設によって軍港となったこの地には、海軍関係を含めて100を超える赤煉瓦の建物群が残っている。

●舞鶴市立赤れんが博物館
京都府舞鶴市字浜二〇一一
☎〇七七三―六六―一〇九五
JR東舞鶴駅から徒歩一五分
開館時間＝九時～一七時
休館日＝月曜日（祝日の場合は翌々日）、祝日の翌日、年末年始
入館料＝一般三〇〇円



# 騒動は弾圧の口実作りに飯場頭が仕組んだ？ ダイナマイトを使う坑夫側に軍隊も出動 「足尾暴動」勃発！

◀900人を超す坑夫が参加した「足尾暴動」で破壊された第2選鉱所。足尾銅山の歴史は古く、発見されたのは慶長15年（1610）。江戸時代は幕府の銅山として利用され、明治4年民間に払い下げられていたのを、10年に古河市兵衛が買収した。

毎日新聞社

**貿易商の古河市兵衛が買収して以来、国内屈指の産出量を誇っていた足尾銅山で、明治四〇年二月四日、坑夫による「暴動」が発生した。ダイナマイトまで持ち出す事態に、政府はついに軍隊を派遣。明治期最大規模となった「足尾暴動」は、労働争議をはじめとする大正期の民衆運動にも大きな影響を与えた。**

## 電話線切断、電灯破壊 見張り小屋を爆破する

明治四〇年二月四日午前八時すぎ――栃木県の渡良瀬川源流、その山間部に位置する足尾銅山の坑夫たちが、突如、蜂起した。男たちは電話線を切断し、電灯を破壊して、足尾に三つある坑道のひとつ、通洞坑の入り口から三〇〇〇メートル奥に入った見張り所を襲撃、ダイナマイトで爆破したのだ。

会社側職員が、命からがら逃げ出す中で、最初は野次馬だった坑夫も二〇人、三〇人と騒動に加わり、参加者は三〇〇人以上にもなった。

五日は、簀子橋坑と本山有木坑口近く

▲日露戦争後に頻発した労働争議の中でも、足尾銅山の争議は、最も激烈なものであった。絵は当時の情況を伝えた明治40年3月10日発行の「風俗画報」から。

で暴動が発生。当初、賃上げ要求に端を発した坑夫たちの実力行使が、さらに最悪の事態へと急変したのは翌六日のことである。

この日、午前九時頃から庶務課などが入っている事務所を襲っていた坑夫らが、一〇時すぎ、今度は足尾銅山の南挺三所長（五四）へ怒りを爆発させた。自宅にひそんでいた南所長を引きずり出し、頭部に傷を負わせたのである。

大蔵省の収税吏から東京鉱山監督署署長をつとめた官僚出身の南所長は、機転を働かせてその場で重体をよそおい、担架で病院へ運ばれた。ところが、「南所長死す」という誤報が流れるほどの彼の迫真の〝演技〟に、坑夫たちは、「ついに一線を越えた」というあきらめと、倉庫に侵入してあおった酒の勢いからか、役員を攻撃の対象に広げていく。

同じ頃、栃木県第四部（警察部）は、坑夫の労働組合「大日本労働至誠会」の

▲坑夫たちは、見張所、事務所、選鉱所などを次々に打ち壊し、火をつけた。 毎日新聞社



足尾支部を組織する永岡鶴蔵（四三）と南助松（三三）を、教唆煽動の容疑で逮捕。続く午前一一時一〇分、植松金章第四部部長が、「事迫る 出兵要す」と軍隊出動を要請した。原敬内務大臣（五〇＝元古河鉱業副社長）が出兵を決め、高崎第一五連隊の三個中隊三〇〇人が足尾に着いたのは、七日午後一時二〇分から三時にかけてだった。

▶足尾銅山の至誠会員たち。永岡鶴蔵、南助松らが中心となって、約四〇〇〇人の組合員を組織していた。「足尾暴動」は一部に至誠会が煽動したという説もあったが、現在では否定されている。 「平民新聞」

ところが、意外にも坑夫たちの方は、「一夜明けて、酔いも醒め、焼け落ちた鉱業所事務所や倉庫、本山坑場などを見ると、果たしてこれからどうなるのかという不安が先にたった」（二村一夫著『足尾暴動の史的分析』）という状態で、すぐに鎮圧されることになる。

検挙者は六二八人、被害が建物・機械など計二八万円（当時の都内一戸建ての家賃が月二円八〇銭）。死者一人だった。

## 明治期最大の〝暴動〟は「飯場頭主謀説」が有力

「坑夫六年 溶鉱八年 嬶ばかりが五〇年」（セットウ節）――当時、はやったこの歌は、坑夫たちの日常をものがたっている。足尾銅山の従業員一万一一〇五人（明治三九年六月）中、三三二〇人を占めた坑夫にとって、「（飯場の）寝床はほとんど蔓年床であり、ノミ・南京虫などがいたるところで巣食っていて非衛生的だった。しかも、食い物は南京米にミソ汁、オカズといえば、塩マス・塩ざけ・塩にしん・豆腐など粗末なものが多かった」（『足尾銅山労働組合史』）という。

さらに、賃金査定や切羽（採掘の現場）の割り当てを行う、いわば坑夫の生殺与奪を握る飯場頭からは、賄賂を強要されてもいた。それに加え、南所長の就任後は、週二日の公休廃止、遅刻者への罰金など労働条件は悪化するばかりだった。二村一夫法政大学教授は語る。

「ただし、足尾の坑夫は、全員が低賃金労働者ではありませんでした。出来高制で、役員より稼ぐ坑夫さえいた。むしろ重要なのは、賄賂などで坑夫に寄生する飯場頭や労働者を蔑視する役員の存在、不公平な賃金査定といった構造的差別に彼らが鬱屈した不満を抱いていたことです。ちょうどそこに、明治三〇年以降、経営方針の転換による賃金凍結、日露戦争後の物価騰貴が追いうちをかけ、会社に対する不満が爆発したのでしょう」

折しも、足尾銅山では、社会主義者・片山潜と関係の深い元坑夫の永岡と、夕張炭坑で「大日本労働至誠会」を組織していた南が、明治三九年一二月、その足尾支部を発足させた。約四〇〇〇人の会員を獲得した同支部は、賃金引き上げ、査定の適正化、経理の公開などをもりこんだ請願書を暴動の直前、友子同盟（坑夫の自治団体）の代表者と作成していた。

そこで問題になるのが、「誰が最初に暴動を起こしたか」という点だ。

当時、俎上にあげられたのは、第一審判決が取った「偶発説」、検察と古河側が主張した「至誠会の煽動説」、それに「飯場頭の主謀説」。この中で「偶発説」は事前に暴動の噂が流れていたこと、二番目の「至誠会の煽動説」は、坑夫の鎮撫に奔走していた南や永岡の当日の行動から、可能性は少ないとされた（明治四〇年九月、南と永岡の無罪が確定）。

「有力なのは『飯場頭の主謀説』です。飯場頭は、作業請け負いの権限を失って坑夫への支配力が弱まっていたうえに、既得権益だった友子同盟の会計担当というピンハネの手段を暴動発生翌日、五日にやむなく友子同盟の執行部に返すことになっていました。このままでは、経営がたちいかなくなるとあせった飯場頭が、至誠会への弾圧の口実を作るために謀った疑いが濃厚です」（二村氏）

今日となっては真相を確かめるすべはないが、少なくとも暴動後、足尾支部が壊滅し、友子同盟が飯場頭の完全な支配下におかれたことは間違いない。

会社は、坑夫約一二〇〇人をいったん解雇。検挙者などを排除して再雇用し、一日標準賃金八〇銭（従来は五〇銭）へのアップを含めた待遇改善策を発表した。

明治期最大のこの足尾銅山の争議は、資本蓄積を急ぐ産業資本と労働者との、先鋭的対立の先駆的、象徴的な出来事だった。これに続いて、北海道の幌内炭鉱（四月）、愛媛県の別子銅山（六月）をはじめ各地で暴動が続出。第一次世界大戦前の最多にあたる年間二四〇件もの労働争議に発展するのである。そして、大正期に入るや、「足尾暴動」に影響を受けた急進的社会主義者らが、労働組合運動や普選運動、治安警察法改正運動などのさまざまな民衆運動を展開することになる。

▲坑夫らによって火をつけられ、焼失した南挺三所長宅。 「写真画報」

# フォト＋日録で再現する365日

▲**高柳報徳社設立(7月)**二宮尊徳の思想の実践をめざし、新潟県高柳の農民が結成。写真は創立記念。報徳社は、日露戦争で疲弊した全国の農村に誕生した。

▶**秋瑾、蜂起失敗(7月13日)**革命結社「光復会」同志と清朝転覆をはかったが、事前に察知され、2日後斬殺された。31歳。写真は2年前の日本講演で。

「写真画報」

▲**大井川鉄橋流失(7月15日)**豪雨のため静岡県中部の大井川が増水、東海道線の島田—金谷間を結ぶ鉄橋が崩壊。月末まで連絡は渡し船となり、混乱をきわめた。

Popperfoto／ユニフォト・プレス

◀**ボーイ・スカウト創始(7月29日)**英国の軍人、ベーデン・パウエルが、斥候術を応用した団体訓練法を試すため少年を集めてキャンプ。これを翌年発表、爆発的反響を呼んだ。

「太陽」

▲**第1回日露協約調印(7月30日)**対独関係の緊張から極東の平和維持を希望するロシアと、大陸の権益を守りたい日本が一致。写真は、交渉に尽力した駐露公使・本野一郎(前列中央)と大使館員。

毎日新聞社

▶**東京勧業博覧会・福引きに長蛇の列(7月28日)**閉会を目前に、10万本のうち100円の当たり籤が34本という、4回目の福引きを行うと、上野の商品館前から切通坂まで延々と列が続いた。

北海道大学附属図書館所蔵

▲**函館で大火(8月25日)**夜10時半頃、東川町の住宅密集地から出火、強風にあおられて燃え広がった。官庁・領事館などを含め市街の過半、約1万2400戸を焼き、8人が焼死。

毎日新聞社

▲**南海電車スタート(8月)**南海鉄道が難波—和歌山市間、汐見橋—極楽橋間など、全線を電化する計画に着手した。使用車は「電1形」(写真)。電化は甲武鉄道(現・中央線)に次ぎ2番目。



毎日新聞社

◀**石津輔蔵(25)、「カメラ行脚」(8月)**大阪写真大展覧会1等入賞を機に、東南アジアに渡航。写真はジャカルタで。3年間、各地で「新発見」を撮り続けた。

「イリュストラシオン」

▲**フランス、カサブランカ襲撃(8月4日)**モロッコ住民による仏水兵殺害事件に報復。艦砲射撃の後、2000人の軍隊を上陸させ、1000人以上を殺傷した。

▶**東京水びたし(8月24日)**台風のため関東地方を中心に大災害が発生、多数の死者を出した。東京も、下町を中心に濁水に洗われた。写真は幸田露伴邸周辺。

「写真画報」

◀**米国に航空部隊(8月1日)**陸軍通信隊内に設立。人員はわずか3人。翌年やっと「ライト・フライヤー号」1機購入(写真)。新たに飛行士二人が加わった。

## 明治40年7月

1(月)●ハーグ平和会議議長、日本の侵略を訴える韓国密使に、会見を拒否(ハーグ密使事件)。
2(火)●韓国で徴兵令公布。
3(水)●韓国統監・伊藤博文、ハーグ密使事件で、韓国皇帝・高宗を追及(19日、皇帝が譲位)。
4(木)●鉱山で騒動をあおる「渡り坑夫」を取り締まる、と新聞に。
5(金)●仏下院、炭坑での一日八時間労働法を可決。
6(土)●群馬県の山十組製糸女工三〇〇人、一六時間労働・食事・工場衛生の改善を要求し紛糾。
7(日)●露のソプラノ歌手・ラビンスキーが東京で公演。初めての、著名な外国人歌手の来日。
8(月)●お役所仕事だった鉄道庁が、民鉄との競争に負けまいと、中元に団扇を配る、と新聞に。
9(火)●太平洋画会は、勧業博美術展の審査を不満とし、賞を返上する、と新聞に。
10(水)●中学校長会議、学校間競技の弊害などを討議。
11(木)●台湾製糖、蒸気式自動鋤を使用開始。
12(金)●結婚媒介所の訪問者、男性は学生・役人などの初婚者、女性は再婚者が多い、と新聞に。
13(土)●東京の路面電車が電力不足深刻、と新聞に。
14(日)●ラムネに代わってサイダーが流行、と新聞に。
15(月)●大井川鉄橋が洪水で崩落、連台渡しが復活。
16(火)●勧業博で芳町の芸者の舞台が大人気と新聞に。
17(水)●富山県泊町で、米価高騰に困った婦女五〇〇人が、米の移出・船積み差し止めを要求。
18(木)●義務教育年限延長で、中学などの入学資格をそれまでの高小卒から尋常小卒業程度とする。
19(金)●東京慈恵会、設立。貧困救済をめざす。
20(土)●福岡県豊国炭坑でガス爆発事故。死者三六五人を出し、明治期最悪の炭坑災害となる。
21(日)●日露、満鉄・シベリア鉄道接続の条約に調印。
22(月)●内務省、ハンセン病患者療養所の設置を道府県に通達。
23(火)●長野県、許可制の女工募集取締規則を制定。
24(水)●第三次日韓協約。韓国が日本の統監下に。
25(木)●日本軍二個大隊、韓国警備のため門司を出発。
26(金)●大阪市立大阪盲唖学校、設立。
27(土)●内務省、外国人案内業者取締法を公布。
28(日)●日露通商航海条約・漁業協約、調印。
29(月)●石井菊次郎外務省通商局長、アメリカ・カナダの移民事情調査のため出発。
30(火)●第一回日露協約、調印。
31(水)●米軍、ドミニカのサント・ドミンゴから撤退。

## 明治40年8月

1(木)●日韓協約に基づき韓国軍解体。軍人を核に各地で反乱・日本軍との衝突が発生(義兵運動)。
2(金)●英で海外派遣軍・国防義勇軍創設法が成立。
3(土)●独露皇帝・外相会談。交渉中の英露協商について露側は、独に敵対するものでないと保証。
4(日)●仏軍がカサブランカを砲撃、占領。
5(月)●韓国統監府の経費は五年間で一億円超、内閣に統監府縮小の議論も、と新聞に。
6(火)●暴風の高知県で漁船大量遭難。八〇〇人不明。
7(水)●清国と米、満州中央銀行設立予備協定に調印。
8(木)●露で地方自治議会議員が、義務教育制度要求。
9(金)●英で、婦人雇用法成立。
10(土)●韓国・江華島で、日韓両軍が衝突。
11(日)●東京の山手線、旅客は電車、貨物は汽車での計画に着手、と新聞に。
12(月)●阿部駐清代理公使、清国に対し、法庫門鉄道は満鉄と並行線との理由で、不承認を通告。
13(火)●文展審査委員会に岡倉天心など四二人を任命。
14(水)●韓国で、男一七歳、女一五歳以下の結婚を禁止。
15(木)●清国人労働者の日本での賃金は、月約一〇円、日本人労働者との軋轢もありうる、と新聞に。
16(金)●活字の製造が需要に追いつかず、と新聞に。
17(土)●第三種郵便物認可規則、公布。
18(日)●第二インター・シュツットガルト大会。植民地問題などを討議、世界戦争反対を決議。
19(月)●戦争防止のためのゼネストを主張した、英独立労働党党首のケア・ハーディが来日。
20(火)●山川均、『資本論』要約を新聞連載。
21(水)●近年、女学校に流行の強行軍修学旅行、行きすぎた精神鍛錬も目立つ、と新聞に。
22(木)●東京鉄道に、電灯兼営を許可。
23(金)●文部省、消防・避難訓練を行うなど、火災対策の大要を各学校に訓示、と新聞に。
24(土)●関東を中心に大暴風雨。死者四五九人。
25(日)●函館で大火。市街の過半、一万戸余を焼失。
26(月)●中禅寺湖が増水、避暑中の外国人四〇人孤立。
27(火)●韓国で、新皇帝・純宗が即位。
28(水)●司法省が、罪人引き渡し条約のない露人犯罪者の取り扱いに苦慮、と新聞に。
29(木)●総武鉄道、両国橋—本所間などで複線化完成。
30(金)●南洋貿易商が、マカオとフィリピンの間で孤島を発見、と新聞に。
31(土)●英露協商調印。イラン・アフガニスタン・チベットなどでの両国の勢力範囲を協定。

▲東京・内幸町で大火(9月30日)午後8時半、「五二会館」から出火、同館はたちまち炎に包まれ崩壊、火は付近に燃え移り、憲政会館本部、ガラス会社なども全焼した。写真は、翌朝の惨状。

「写真画報」

▶「ルシタニア号」処女航海(9月)英・キュナード汽船が、乗客2000人を運ぶ世界最大の客船を大西洋航路に投入。速さと豪華さを競い合う諸国の中で、またリード。戦時には軍艦に転用できた。

▼旭川—釧路間が全通(9月8日)日高山脈に狩勝トンネル(写真)が完成し、十勝線・釧路線が接続、合わせて釧路線と改めた。さらに滝川—根室間まで延長、根室本線となったのは大正10年である。

▼万世橋取り壊し(9月)甲武鉄道万世橋駅建設のため、東京・神田川に架かっていた洋風・石造りの眼鏡橋(写真)を撤去。上流に鉄橋を建設、新万世橋と称した。

▼バンドマン喜歌劇団、東京公演(9月)前年に続き40~50人の一行が来日、神田・青年会館で英国の当たり狂言を見せた。以降、大正中期まで毎年訪日、後の「浅草オペラ」に強い影響を与えた。

▲岡倉天心を会長に国画玉成会設立(9月1日)文展開設に際し旧派系の正派同志会に対抗、安田靫彦・鏑木清方・菱田春草らの青年作家が結集。東京・上野に百余人の賛同者を集め、創立総会を開いた。

「写真画報」

## 明治40年 9月

1(日)●上海など中国五ヵ所に日本人居留民団が成立。
2(月)●東京の吾妻橋—千住間で、汽船の運航開始。
3(火)●大阪商船第二期増船計画八隻一万一二四四トンがほぼ完成、第三期計画は六〇〇〇トン級六隻。
4(水)●九州各地で、日本人仲介業者などの手続きの不備から中国人労働者が就労できず、混乱。
5(木)●大日本教育団、ふえ続ける女性教員の長所・短所など適性問題と採用数を調査開始。
6(金)●東京の麻布警察署、猥褻画商を大量送検。
7(土)●バンクーバーで、アジア人排斥同盟会が日本人家屋五二戸を損壊(カナダ政府が損害賠償)。
8(日)●狩勝トンネル完成、旭川—釧路間鉄道が全通。
9(月)●海軍が新式無線機開発、実証試験へと新聞に。
10(火)●東京—北海道間に直通電話が開通。
11(水)●韓国の義兵運動激化で、江原道准陽地方での日本人単独旅行が禁止される。
12(木)●「軍令に関する件」公示。統帥権独立に法的根拠を与え、軍の政治からの独立を強化。
13(金)●東京歯科学院、東京歯科医学専門学校に昇格。
14(土)●日本初の豪華客船「天洋丸」が長崎で進水。
15(日)●「時事新報」が「美人」募集。米国・「シカゴ・トリビューン」紙の美人コンクールに挑戦。
16(月)●戦艦「鹿島」、広島湾で訓練中爆発、四二人死傷。
17(火)●東京音楽学校、邦楽の調査研究部門を開設。
18(水)●陸軍管区表改正公示。常備一九個師団体制に。
19(木)●万国郵便条約、批准・公布。
20(金)●和服冬物、普段着には丈夫さが受けて紬、裾模様は派手すぎず奇抜な趣向に人気と新聞に。
21(土)●日露戦争の論功行賞を実施。山県有朋・伊藤博文・大山巌には公爵を授与。
22(日)●狩猟解禁を前に、最近雉が減少、保護区を設ける必要がある、と新聞に。
23(月)●東京の小宮村(現・あきる野市)住民五〇〇人、小学校新設の位置を不満とし、郡役所に抗議。
24(火)●天候不良で鮮魚は高値。鯛一貫目二円、平目一円六〇銭、小鯵一尾一銭など、と新聞に。
25(水)●銀行集会所晩餐会で、婦人問題・労働者問題を解決すべき時期に来ていることが話題に。
26(木)●ニュージーランドが植民地から自治領になる。
27(金)●樺太地名整理調査委員会、地名の日本語化案を、内務省に報告。コルサコフを大泊など。
28(土)●タフト米陸軍長官来日、移民相互禁止を提案。
29(日)●河合林太郎、板ガラス製造窯の特許を取得。
30(月)●鐘紡熊本工場の女工一〇人、虐待され脱走。



▲第1回日本アマチュアゴルフ選手権(10月20日)神戸と横浜のクラブが、六甲山上コースで開催。写真はその優勝盃。選手14人は全員外国人で、日本人の参加は大正に入ってから。

日本ゴルフ協会提供

▲皇太子、韓国訪問(10月16日)外交・内政を握った日本は、併合への地固めを着々と実行。写真は渡韓記念。前列中央、左側が日本の皇太子、右側が韓国の皇太子・李垠。

「伊藤博文伝」

◀日米蓄音機製造、設立(10月31日)後の日本コロムビア。貿易商の米国人らが、現在の川崎市付近に設立。輸入蓄音機の販売と国産初のレコード製造に着手。写真は当時の工場。

▼早大、25周年式典(10月20日)「大隈銅像」除幕式(写真)の後、この日制定された校歌「都の西北」を歌いながら、学生らが二重橋前まで提灯行列。高田早苗学監の音頭で、万歳三唱した。

◀ニューヨーク・プラザホテル開業(10月1日)後に世界で最も美しいとされるホテルが誕生。建築費1000万ドル、1000室。前夜、無数のシャンデリアが輝く宴会場で、盛大に祝典が開かれた。

▲鉄道国有化完了(10月)前年に公布された鉄道国有法により、全国主要17私鉄を次々買収。国内の9割が国有となり、「国鉄」と言われるようになった。写真は、前年の日本鉄道盛岡工場解散記念。

## 明治40年 10月

1(火)●鉄道国有化、予定の一七私鉄買収を終了。
2(水)●群馬県水交社女工、「上司に不満」としてスト。
3(木)●七五三の男児祝着は紺絣に小倉袴が普通だが、上物をあつらえると四〇~五〇円、と新聞に。
4(金)●大阪・淀川中洲の廃弾工場で、弾薬三万発・火薬庫三棟が爆発、死者六六人。
5(土)●東京の貸本事情、一ヵ月間の貸し出しは一店平均一二五〇冊、小説と講談に人気と新聞に。
6(日)●久原鉱業所、東京・佃島に機械製作所を設置。
7(月)●韓国・慶尚南道で、反日運動組織の三〇〇人と日本の電信援護隊が戦闘。
8(火)●京都・西陣で、「友禅部職工同盟会」結成。
9(水)●暴風雨の北海道で、「春日丸」が沈没、乗客・乗員一〇〇人は無事救助。
10(木)●シベリア経由の小包郵便再開、と新聞に。
11(金)●飢饉で暴動が続発するインドで、二〇人以上の集会が禁止される。
12(土)●ニューヨークのニッカーボッカー信託で取り付け、翌日支払い不能に。銀行パニックに拍車。
13(日)●カナダ首相、日本人排斥に遺憾の意を表明。
14(月)●みかんのはしり、一個一銭見当、と新聞に。
15(火)●サンフランシスコの日本人経営クリーニング店が、排日運動の米国人に襲われる。
16(水)●皇太子嘉仁親王、訪韓し、皇帝を訪問。
17(木)●英米間で、新聞社向け無線通信サービス開始。
18(金)●ハーグ平和会議閉幕、万国平和条約に調印。
19(土)●箕面有馬電気軌道、設立(現・阪急電鉄)。
20(日)●早大創立二五周年記念式典、「都の西北」発表。
21(月)●ニューヨークで、オペレッタ「メリー・ウィドー」上演、観客が舞台と一緒に歌い出す。
22(火)●営業禁止処分の浅草の悪質飲み屋、「新聞縦覧所」の形をとり営業続行、と新聞に。
23(水)●憲兵二五四人が、治安維持のため韓国へ出動。
24(木)●巡洋艦「利根」が進水。初めてクリッパー式船首を採用し航海性能向上、太平洋進出にらむ。
25(金)●東京・上野で、第一回「文展」が開幕。
26(土)●米国、移民制限を遵守するよう日本に要請。
27(日)●八幡製鉄所に不正続出、取り調べで、作業はほとんど中止状態、と新聞に。
28(月)●陸軍、歩兵の兵役を三年から二年に短縮。
29(火)●警察事務執行に関する日韓取極書調印。韓国の警察行政を日本人警察官がすべて執行。
30(水)●二葉亭四迷、「東京朝日新聞」に「平凡」を連載。
31(木)●日米蓄音機製造、設立(現・日本コロムビア)。

▲世界初のヘリコプター(11月13日)フランスの自転車業者・コルニュが設計・製作。ル・アーブル港近くで高度1.8メートル、滞空20秒の有人浮揚に成功した。

▲レーニン、亡命(12月)「1905年革命」の際、労農同盟中心の戦術を提起したが、ストルイピン内相にはばまれた。37歳。写真は亡命先でチェスに興じるレーニン(左)。

◀森鷗外(45)、軍医総監に昇進(11月)日露戦争からの帰還後、文壇の活気に刺激され短歌会を創始するなど文壇にも復帰、医務局の最高職についた。前列左端が鷗外。

「太陽」

▼独皇帝・ウィルヘルム2世、英国訪問(11月)モロッコ事件により英仏協商強化を招き、孤立脱出に必死だった。写真は、ウインザー城で皇帝(前列左端)を迎えた英王族。

▶日本製鋼所、創設(11月1日)国有化で鉄道事業を失った北炭が、海軍の支援で兵器生産に進出。会長・井上角五郎。英・ビッカース社らが共同出資。写真は、室蘭の本社工場。

呉市企画部海事博物館推進室提供

◀川崎造船所で、民間初の軍艦「淀」が進水(11月19日)排水量1250トンの通報艦。備砲・魚雷発射管などの兵装工事は、海軍の手で行われた。写真は翌年4月の完成時。

## 明治40年11月

1(金)●鉄道庁、買収線を含め全線の運賃を統一。
2(土)●南満州鉄道・長春駅が開業。
3(日)●浅野吉次郎、ベニヤ板を独自に開発、製造開始。
4(月)●大隈重信ら、「印度貿易研究会」を開催。
5(火)●鉄道庁が、碓氷・箱根の両峠は電車で牽引力を強化する計画、と新聞に。
6(水)●東京で電力会社の架設電線二〇〇貫目を三ヵ月にわたり切断・故売していた男二人を逮捕。
7(木)●東京座の台湾紹介映画が大人気、と新聞に。
8(金)●ロンドン―パリ間で、初の写真電送に成功。
9(土)●日露戦争に従軍後、検定試験で仙台二高に入学した晩学の学生の美談が新聞に。
10(日)●名古屋港が開港。
11(月)●ベルギーで気球競技、優勝のドイツ機は一〇〇〇㌔を飛行、と新聞に。
12(火)●日本郵船、世界一周運賃を約一〇〇円値上げし、約一〇〇〇円に、と新聞に。
13(水)●仏のコルニュ、ヘリコプターで浮揚に成功。
14(木)●露で、第三国会開幕。反動派が革命派を弾圧。
15(金)●台湾・新竹庁で、住民が蜂起(18日、鎮圧)。
16(土)●米大使、林外相に、労働者渡航制限のさらに厳重な励行を要請(日米紳士協約の第一号)。
17(日)●絵はがきは観艦式などの「記念もの」があきられ、美人・俳優・風景の写真に人気、と新聞に。
18(月)●米労働総同盟、日本人排斥を主張。
19(火)●通報艦「淀」、川崎造船所で進水。民間初の一〇〇〇㌧級軍艦建造。
20(水)●東京商工銀行が支払い停止(翌年6月にかけ、全国の銀行で取り付け・支払い停止が続出)。
21(木)●大阪の活版技工組合加盟七〇工場で賃上げ要求(24日、二〇工場以上で七〇〇人がスト)。
22(金)●文芸協会演芸部第二回大会で、坪内逍遥訳の「ハムレット」を上演(翻訳劇の初演)。
23(土)●川崎競馬、悪天候で観客の入り悪く、開始を遅らす。翌日も、好天気にもかかわらず不入り。
24(日)●東京都の有権者は、四年前の七~八割増、約四万人になる見こみ、と新聞に。
25(月)●政府・元老会議、財政計画を審議。
26(火)●東京地裁で、徴兵回避を二五〇円で請け負った官吏・軍医らの公判。
27(水)●京都帝大に、研究の不便さから大阪移転論。
28(木)●ベルギー、コンゴを併合。
29(金)●甲府市でコレラ、この日までに患者一一人。
30(土)●中国革命同盟会、広西省鎮南関で蜂起(失敗)。



富重写真所提供

◀熊本に軽便鉄道が開通(12月19日)市内安巳橋―水前寺間を、小さな蒸気機関車が客車1両を引いて運行。市電登場まで、主要交通機関として栄えた。

▼駒橋水力発電所、試験送電(12月20日)東京電燈が山梨県に建設。翌年、東京市内に本格送電。低料金で利用者をふやして、シェア競争に勝った。

▲駐米大使・青木周蔵を召喚(12月30日)この年の日米間最大の課題、移民問題で、政府の意思を確認せずに、米国に移民禁止を伝えたため。写真は大使(中央)と同僚。

### 証言・あの日この日
## 菊池 寛(18)

富重写真所提供

**3月某日** 〈両方とも茶菓の饗応をしてくれたが、早稲田が、おせんべいか何かであつたのに対し、慶応は私としては生れて初てである洋菓子を出してくれたので、たいへんおいしく思つた〉(菊池寛『半自叙伝』)

読書好きで、抜群の記憶力の持ち主だった菊池寛少年は、成績も優秀だった。しかし家が貧しく、十分な教育は受けられそうもなかった。そういう菊池少年の唯一の楽しみは、明治38年開館した香川県教育会図書館だった。その頃、図書館の蔵書2万冊を読破したといわれる。そしてこの年、「日本新聞」の課題作文「博覧会」が入選、上野の「東京府勧業博覧会」見学のため、初めて上京する。ところが、向学心に燃える菊池は、この上京を利用して、早稲田大学や慶応義塾大学などを見学。慶応では、生まれて初めて「洋菓子」を食べる。(山崎行太郎)

CORBIS-BETTMANN/PPS

▲「ホワイト・フリート」艦隊、世界一周に出発(12月16日)強化著しい米艦隊が、新鋭戦艦など16隻をつらね、パワーを世界に誇示。翌年には日本を訪問、これに日本は「大歓迎」でこたえた。

▶アンナ・パブロワ、「瀕死の白鳥」初演(12月)サン・サーンスの名曲をフォーキンが振り付け、ペテルブルグ市民を魅惑した。後、44ヵ国を巡演、20世紀バレエの幕を開いた。

## 明治40年12月

1(日)●松屋呉服店、東京・日本橋に新築開店。
2(月)●長屋の構造規制施行で、違反建築は取り壊されるから注意、と新聞に。
3(火)●帝国運輸、貨物自動車一五台で営業開始。
4(水)●日銀、公定歩合を二銭に上げ金融を引き締め。
5(木)●東京数学物理学会、関孝和二〇〇年忌記念・本朝数学通俗講談会を開催。
6(金)●英、エチオピアと協定、英領東アフリカの国境を画定。
7(土)●北海道で暴風雪、家屋損壊などで死者四二人。
8(日)●清国、間島の境界交渉で、主張を譲らず。
9(月)●東京湾外でのトロール漁業が好成績と新聞に。
10(火)●広西省の革命軍には、安南の革命党員から武器が供給されている、と新聞に。
11(水)●北京滞在の犬養毅、袁世凱ら清国要人と会見。
12(木)●ルーズベルト米大統領、三選出馬を否定。支持者は困惑。
13(金)●反乱相次ぐ韓国で、皇帝が帰順奨励の詔勅。
14(土)●大鹿和吉ら、清国の革命軍に加わるため奉天紙幣の偽造を計画、逮捕され東京に護送。
15(日)●中村屋が新宿に移転。後、文化人のサロンに。
16(月)●米国主力艦隊、世界一周示威航海に出発。
17(火)●霧の名所・ロンドンで、気象台が霧を消す研究を進めている、と新聞に。
18(水)●清国、英と山西鉱山採掘権回収契約を締結。
19(木)●東京の下宿代、室料が三畳二円五〇銭から六畳四円、賄い料は七~九円が普通、と新聞に。
20(金)●南海鉄道南海線で、自動閉塞式信号を採用。
21(土)●青森県の中学校で、生徒処分めぐり校長と教師対立、処分主張する教師が集団で辞表提出。
22(日)●社会政策学会、工場法をテーマに第一回大会。
23(月)●東京商業会議所会頭、増税反対演説会を開催。
24(火)●三菱製紙所、竹パルプの製造実験に成功。
25(水)●東京・新宿警察署、年末取締りにあわせ、広尾・千駄谷・西大久保・柏木に派出所を新設。
26(木)●カナダ労相、移民制限の内協定を結び帰国。
27(金)●日露鉄道会社の満州―日本間貨物争奪が激化。
28(土)●タバコ値上げ実施。敷島一〇銭、朝日八銭、チェリー七銭、ゴールデンバット五銭など。
29(日)●カラチで、第一回インド・ムスリム連盟大会。イスラム教徒の政治的結集めざす。
30(月)●篠原勇作、漢字タイプライターの特許取得。
31(火)●九月以降、最大七〇〇〇㌧に達した大阪・梅田駅の停滞貨物が、ようやく解消、と新聞に。

# 我楽多市

## 流行語 "優柔不断"議員、確保の秘策

「カン詰め」。この頃、地方議会がさかんになったが、その中で目立ったのが、他人の意見に引きずられる議員の多いこと。そこで、フラフラしている議員を旅館などに閉じこめて理論武装させることが流行、これが「議員のカン詰め」と呼ばれた。

「千束香水」。若い男性の間で、私娼または、はすっぱな女のこと。東京・千束町界隈は私娼のメッカで、彼女たちは一瓶四〇銭の安香水をぷんぷんさせていたから、千束の私娼を「千束香水」と呼んだ。それが転じて、私娼や、はすっぱな女をさすようになった。

「リボン」。女学生用語で、目立ちたがりのこと。この年、リボンが大流行。特に外国製は、大きくて派手なので品切れが相次いだ。女学生は目立ちたがりや、男に媚びを売る同性への反感をこめて、「あの人はリボン」などと使った。

「ラクダ」。男女の二人連れのこと。この年、上野動物園の入場者が急増、前年より四割以上多い一一〇万人に達した。人気はフタコブラクダと、日本に初めて来たキリンで、二人連れはラクダのこぶのようにくっついているという意味でこう呼ばれるようになった。

▲▶この頃、さまざまな種類の双六が出そろい、子どもたちの人気を集めた。写真は、この年11月に刊行された「教育女子遊戯双六」。

## CM100年

新聞CM「壹萬圓懸賞ヘルプ字さがし――ヘルプ」（津村順天堂、現・ツムラ）

壹萬圓懸賞ヘルプ字さがし

夏季衛生上の大懸賞

下りはらとめ ヘルプ

壹等賞（金側懐中時計）二本
貳等賞（朱珍丸帯）二本
三等賞（新案浴衣）五十本
四等賞（美術絵葉書）十萬本

下り腹止めヘルプは家庭の常備薬なり

ヘルプの特色

効能

HELP

懸賞字さがし

規定

定價表

ヘルプ本舗
津村順天堂本店
津村順天堂支店

▲総額1万円の懸賞広告。これが懸賞広告のルーツとされている。

## 流行 ご令嬢に人気 新楽器・マンドリン

今や教養ある令嬢は、皆、洋楽に走って、バイオリン、ピアノの大流行となっているが、この秋はマンドリンが新楽器として、またまた若い女性の人気を集めそうだ。

マンドリンはハーモニカを日本に初めて輸入した比留間賢八氏がもたらしたもので、比留間氏は明治三三年再び渡欧、各地でマンドリンの大家からマンドリンの妙技を習得して帰国し、実業家の令嬢などに手ほどきをしていた。その甲斐あって、このたび一大合奏会を催すにいたったもので、これを機に日本人に学習しやすい楽器として、マンドリンの普及をはかるという。

（「婦人画報」一〇月号）

▲「団団珍聞」6月22日号に掲載された「現今の士農工商」。軍人がのさばり、商人は暴利で太り、その間で農民と工員が小さくなっている。

日本漫画資料館提供

## 食 一斗二升炊きの大釜四個 大相撲の食事作り

大相撲は場所中、力士、年寄、行司など約一〇〇〇人に朝、昼二食を給与することになっている。この一月場所の炊き出しの材料を見ると、米が四斗俵で三五〇俵、醤油五五樽、味噌二〇貫入り一二樽、たくあん八四〇〇本。

これに使う器具類は、米磨ぎ樽が四斗樽、炊き出し用の釜は一斗二升炊きの大釜が四個、湯沸かし用大釜一個、汁釜一個。これらを調理するために米磨ぎとして二人、釜前三人など総計三一人がかかりっきりで働いている。そして燃料の薪や炭は、薪が二万七〇〇〇本以上、炭は二八〇俵（六貫目入り）に達するという。

（「時事新報」一月二〇日）



# はやり歌

毎日新聞社

▲もともとは丹波・篠山地方の民謡だったが、一高で歌われるようになり、さらに一般に広まった。学生が騒ぐ時などによく歌われた。写真は静岡高校生。

**デカンショ節**

デカンショデカンショで
半年ゃ暮らすヨイヨイ
後の半年ゃ　寝て暮らす
ヨーイヨーイデッカンショ
デカンショデカンショと
唄うて廻れヨイヨイ
世界何処の　果てまでも
ヨーイヨーイデッカンショ

酒は呑め呑め
茶釜で沸かせヨイヨイ
御神酒あがらぬ　神はない
ヨーイヨーイデッカンショ

丹波篠山
山家の猿がヨイヨイ
花のお江戸で　芝居する
ヨーイヨーイデッカンショ

**旅愁**

作詞 犬童球渓　作曲 オードウェイ

更け行く秋の夜　旅の空の
わびしき思いに　ひとりなやむ
恋しやふるさと　なつかし父母
夢路にたどるは　故郷の家路
更け行く秋の夜　旅の空の
わびしき思いに　ひとりなやむ
窓うつ嵐に　夢もやぶれ
遥けき彼方に　こころ迷う
恋しきふるさと　なつかし父母
思いに浮かぶは　杜のこずえ
窓うつ嵐に　夢もやぶれ
遥けき彼方に　こころ迷う

◀原曲は、アメリカのオードウェイ作曲、「ドリーミング・オブ・ホーム・アンド・マザー」。明治四〇年、『中等教育唱歌集』（写真）におさめられている。

民音音楽資料館提供

## 三面記事 知って仰天！日本の低所得

この年一一月、世界各国の職業別賃金表（一日の所得）が出版された。世界一八ヵ国、二〇〇種以上の職業が網羅されているが、日本人の所得の低さにあらためてビックリ。

▶外務大臣在任中の「陸奥外交」の功績で、外務省構内に陸奥宗光の銅像が建てられ、一〇月二四日、除幕式挙行。

〈日本〉
総理大臣　二一円九三銭
東京市長　一六円五一銭（大臣、日銀総裁、陸軍大将と同額）
各府県知事　一〇円四一銭
幹部俳優、有力力士　九円三〇銭
一流芸者　一円六六銭
小学校長　一円二〇銭
駅員　三〇銭
三井家理事　八六円五〇銭
住友、鴻池、三菱理事　二六円八三銭

〈外国〉
米大統領　五四七円六五銭
米国務長官　一六五円一〇銭
大工　六円三九銭
英銀行総裁　四六八円六七銭
大臣　一〇四円一五銭
浮浪者　一円五〇銭

（法令館本店『世界各国人民一日所得一覧表』）

## 社会 傘さして荷車はダメ 当時の交通違反事情

京都市内のお米屋さん方に、明治四〇年の交通違反切符が二枚保存されている。切符は「違警罪即決言渡書」という名称で、和紙に筆で書かれている。

一枚は一〇月一九日付で、当時の当主が祇園の路地を荷車で通行中、松原署の警察官に検挙された時のもので、違反事実は「傘をさして荷車を引きたるゆえ」とある。もう一枚は七月一〇日付。こちらは店の前に荷車を止めたことが駐車違反に問われた。罰金は両方とも三〇銭である。

（「京都新聞」平成元年九月二八日）

◀この年、熊本県の名産、球磨焼酎「房の露」が創業された。写真左から二人目が創業者の堤重蔵。

房の露提供

## 風俗 今度は蝋人形がヤリ玉 勧業博の裸体問題

今回の東京勧業博覧会では、美術品については、格別裸体問題も起こらなかったのに、思わぬところから火の手が上がった。第一号館に陳列された山城製作所出品の"双胎児妊娠婦人の縦断蝋製模型"の腰部が、一昨日から突然、白布におおわれたもので、場内に陳列された各種裸体模型の出品者は恐慌をきたしている。

この模型は大沢謙二帝大教授をはじめ、博士・学士の学理と実験に基づき、山城氏の熟練した技巧によって製作されたもので、精巧をきわめた学術参考品だった。

しかし観覧者の中には、係員に面白半分に局部の説明を求むるものもあるところから、無識の愚漢はこれらを猥褻物と見ているとの論が起こり、やむなく腰部を隠蔽したものという。

（「東京朝日新聞」四月二六日）

▶「仁丹」は明治三八年に発売された。写真は、四〇年に建てられた大阪駅前の大イルミネーション。

森下仁丹提供

## この年の初もの カレー南蛮 早稲田のそば屋が考案

●**エアコン**　富士紡保土ケ谷工場に、蒸発冷却装置が設置された。

●**メロン栽培**　愛知県牟呂吉田村（現・豊橋市）で、マスクメロンの栽培が始まる。民間におけるメロン栽培の初め。

●**アルバム**　この頃、黒田久吉がアルバムを売り出す。アルバムという言葉も初めて使われた。

●**子ども靴**　銀座ヨシノヤがドイツ人から依頼され、ドイツから取り寄せた靴をまねて作った。

# 万国平和会議に皇帝・高宗が三人を派遣
# 韓国統監・伊藤博文は〝併合〞への好機ととらえた
# 「ハーグ密使事件」の暗転!

日本によって主権を蹂躙されつつあった韓国の高宗帝は、一九〇七年、ハーグで開催された第二回万国平和会議に、〝密使〞を送る。日本の不当な支配ぶりを世界に訴えるためだった。だが、その時点では、列強は日本の朝鮮支配の容認に傾いており、〝密使〞の派遣は日本の支配を強化する口実に使われてしまったのである。

## 空振りに終わった韓国皇帝の〝密使〞

一九〇七年六月二四日、オランダのハーグに韓国の元議政府参讃・李相卨(三六)、前平理院検事・李儁(四八)、そして李瑋鍾の三人が到着した。ハーグでは、六月から一〇月までの長期にわたって、第二回万国平和会議が開催されていた。ロシアのニコライ二世(三九)が提唱したこの会議には、世界四四ヵ国の代表が参加していた。

そしてここに、日本により祖国の主権が侵されつつあった韓国皇帝の高宗(五五)は、起死回生の望みをかけ、ひそかに三人の〝密使〞を送ったのである。高宗は、日本が国際法を犯し、韓国の主権を蹂躙して保護国化を着々と進めていることを訴え、列強に韓国の国権回復に対する理解を求めようとしたのだった。

三人のうち、李相卨と李儁はロシアのペテルブルグに入り、ニコライ二世に皇帝の親書(ハーグ会議への韓国代表参加に便宜を、という内容)を提出した後、陸路ハーグに到着した。二人はハーグで李瑋鍾と合流し、会議の議長役をつとめるロシアのネフリュードフをはじめ、アメリカ、イギリス、フランス、オランダの各国代表団を精力的に訪問し、一九〇五年に締結された「第二次日韓協約」が無効であることを訴えた。

しかし、彼らはロシア、アメリカ、イギリスの代表とは面会すらできず、平和会議への出席も許されなかった。この時点ではすでに、列国はポーツマス条約(日本の、韓国に対する政治・経済・軍事面での卓越した利益を承認することなどが決められた)に同意していたため、〝密使〞たちの外交努力は水泡に帰す以外になかったのである。具体的には、日英間ではイギリスのインド領有が、日米間ではアメリカのフィリピン領有が、それぞれ日本の韓国保護国化の容認とバーターになっていた。結局、〝密使〞はオランダ人ジャーナリストが主催する会議で演説するとともに、アピール文を配布する以外になす術がなかったのである。

▶この年の六月一五日から一〇月一八日まで、オランダのハーグで開かれた第二回万国平和会議。韓国皇帝・高宗は、この会議で、韓国が日本の支配下にあることの不当さを訴えようとした。

▲日本の圧力で、譲位させられた高宗(右から二人目)と、新皇帝の純宗(その左)。高宗は「韓国併合」の後、徳寿宮李太王と称され、日本の皇族の待遇を受けた。

オランダ駐在の都築馨六公使から外務省に送られた報告では、「小国の代表は概して韓国に同情的だったものの、大国はこれを聞き入れなかった」としている。

〝密使〞の一人である李儁は、こうした各国の態度に抗議して、みずからの命を絶った(一説には、病死説もある)。

## 皇帝退位、軍隊解散で国家の実権を乗っ取る

一九〇六年に設置された日本の韓国統監府の初代統監となった伊藤博文(六五)は、この〝密使〞の派遣に激怒した。伊藤は皇帝の高宗に対し、「〝密使〞の派遣は日本に対する明白な反逆行為である。日本が韓国に宣戦布告する十分な理由となる」と威嚇した。その一方で、伊藤は一九〇七年七月三日、林董外相(五七)に次のような電報を送っている。

「この際、韓国に対して局面一変の行動を執るの好時期なりと信ず。(中略)税権・兵権、又は裁判権を我に収むるの好機会を与うるものと認む」

そして実際、伊藤は彼の方針にそった、日本政府の決定と天皇の裁可を要請した。その方針とは、①高宗に譲位させ、後継に皇太子をあてる、②韓国政府の決定には(伊藤)統監の副署を要する、③統監に「副王」ないし「摂政」の権限を与える、④主要官庁の大臣ないし次官に日本政府派遣の官僚をあてる、といった内容だった。これは、まさに国家の乗っ取り以外の何ものでもなかった。

すでにこの時点で、李完用首相(四九)をはじめ韓国閣僚は親日派で占められ、伊藤の意を体して皇帝に譲位を迫った。皇帝は抵抗したがはたせず、純宗(三三)の即位を認めた。だが純宗は精神障害を持ち、国家の主権者たりえなかったのである。まさにそれが、日本のねらいでもあった。

皇帝の譲位式は、七月二〇日にあわた

▶平和会議では、韓国が「外交権」を失っているとして出席を拒否され、密使の一人、李儁(写真)は、抗議の自決をする。

▲7月19日、新皇帝の朝見式の前日、日本軍は、王宮に向けて砲車を配置した。

# アポリネールがポルノ小説に旅順の日本兵を登場させた理由

佐伯　修

「ミラボオ橋の下をセエヌ河が流れ／われ等の恋が流れる／わたしは思い出す／悩みのあとには楽みが来ると」（「ミラボオ橋」、堀口大学訳詩集『月下の一群』より）

フランスの詩人、ギヨーム・アポリネール（一八八〇〜一九一八）といえば、まず右のような甘美な抒情詩の作者として記憶されているのではないだろうか？　あるいは、シュルレアリスムの芸術運動の旗手の一人としてや、画家のマリー・ローランサンの恋人として、名前をおぼえた人も少なくないだろう。だが、彼を、二〇世紀の伝説的なポルノ小説作者の一人として記憶する人も、きっといるはずである。

アポリネール作とされるエロティックな小説はいくつかあるが、ここに紹介するのは、この年、匿名で刊行された『一万一千本の鞭』で、アポリネールの死後、彼の作品であったことが確認されている。

内容的には、ルーマニアの青年貴族、モニイ・ヴィベスクが、世界を股にかけた色道遍歴と、性の快楽追求の中での殺人を繰り広げ、ついには死にいたるという一種の「貴種流離譚」。そして、サディズム、マゾヒズムやスカトロジー（糞尿愛）などの変態性欲が、これでもかと続出する内容は、芸術性の追求よりも、遊び心を重視した、荒唐無稽な娯楽作品という印象が強い。

さて、肝心なのは、この作品の主人公が、日露戦争下の旅順に現れ、そこでポーランド女性相手にサディスチックな性行為を行ったことが、心ならずも日本軍を勝利に導き、彼自身は日本軍に処刑されてしまう、というストーリー展開である。

「一万一千人の日本兵が、向かい合って二列に並んでいた。ひとりひとりが手にしなやかな鞭を持っていた。モニイは裸にむかれて、死刑執行人たちが両側に居流れるこの残酷な道を歩かなければならなかった」（須賀慣訳）

群がる小柄な黄色人種に、白人の美青年がなぶり殺しにあうという情景は、西欧人の「黄禍論」のイメージそのままである。ただし、アポリネール自身は、当時のフランス人としては、格別に人種差別的だったわけではなく、来日経験もない。むしろ、彼は、中国人の少年オカマや、黒人女の召使い、キモノ姿の日本人娼婦同様、当時の読者たちの好みそうな〝趣向〟のひとつとして、日本兵の大群を用いただけだろう。

なお、シュルレアリストの詩人、ポルノ作者のほか、アポリネールのもうひとつの顔は、塹壕内の男の世界を描くファナチックな戦争詩人であった。

▲この年、彼は画家のローランサンと出会う。

オリオン・プレス

だしく行われたが、それは新旧いずれの皇帝の姿もない異例なものだった。しかも、式の行われた慶雲宮からは、抗議する民衆によって焼き討ちされた李完用首相の邸宅の火災が見え、日本軍の一個大隊が宮中の警備にあたるという異常事態だったのである。

日本は、すでに一九〇五年一一月の「第二次日韓協約」で韓国の外交権を手中にしていたが、これを機に、一九〇七年七月二四日、内政権をも掌握する「第三次日韓協約」の締結を強行する（韓国側はこれらの協約を違法・無効としている）。

こうした日本の高飛車な措置に、韓国の民衆だけでなく、軍隊までもが反抗し始めた。これに対し日本側は、八月一日、韓国軍隊六〇〇〇人の解散（宮中の歩兵一個大隊六四〇人をのぞく）という強硬路線を選択した。皇帝の退位、軍の解散に抗議する兵士らは各地で反日を掲げ、武装蜂起を試みた。たとえば江原道では、軍解散に抗議する将校が武器庫の武器や銃弾を兵士や住民に分け与え、日本軍守備隊を寄せつけない頑強な抵抗を示した。「義兵」と呼ばれる彼らのゲリラ戦は各地で展開される。一九〇七年から一九一〇年の日本による併合までに、義兵と日本軍との交戦は三〇〇〇回近くにのぼり、約一万八〇〇〇人の義兵の血が流れた。そして彼らが、後の抗日パルチザンとなっていく。

「日本はこうして韓国の名前こそ残したものの、軍事力を背景に外交、内政の主権をことごとく奪い去りました。日本が韓国の保護国化を政策として明確に打ち出したのは、一九〇一年の、桂太郎内閣の『政綱』に始まります。そして一九〇四年、一九〇五年の二度にわたる日韓協約で、韓国は主権を蹂躙されました。高宗皇帝は六回にわたる〝密使〟外交を試みていますが、ハーグ会議の時点ではすでに、外堀が埋められた状態となっていたのです」

と語るのは、近代日朝関係史を専攻する海野福寿明治大学教授である。

朝鮮の住民の流血の抗議をも踏みにじり、日本の朝鮮支配は、一九一〇年の「併合」に向かって突き進んでいく。そしてその間に、初代統監の伊藤博文は一九〇九年、安重根（当時・三〇歳）の銃弾によって落命するのである。

イリュストラシオン

▲7月20日の朝見式の日、民衆をすべて追い払い、重装備で警備にあたる日本軍。



# 往きて還らぬ

毎日新聞社

▲9月14日　綱島梁川(34)
文芸評論家。高山樗牛との歴史画論争や、『予が見神の実験』（明治38年）が話題に。評論集『梁川文集』など。

毎日新聞社

▲5月12日　J・K・ユイスマンス(59)
仏の小説家。1884年『さかしま』を発表。キリスト教の神秘を描いた『大伽藍』、美術評論『近代芸術』も著す。

▲2月2日　D・I・メンデレーエフ(72)
ロシアの化学者で、1865年ペテルブルグ大学教授。1869年元素の周期律を発見したことで世界的に知られる。

平凡社提供

▲11月26日　3代目三遊亭圓遊(57)
落語家。高座での滑稽な「ステテコ踊り」で大人気に。後年あまりにも有名となり、俗に「初代」と言われる。

▲9月2日　陸羯南(49)
明治期の代表的なジャーナリスト。明治22年新聞「日本」を創刊。国民主義を提唱し、政治の道徳性を強調した。

毎日新聞社

▲1月13日　川崎八右衛門(72)
実業家。明治7年川崎組を創設し、官庁の為替業務を行う。13年に川崎銀行と改称、金融業の川崎財閥を築いた。

◀9月4日　E・H・グリーグ(64)
ノルウェーの作曲家。一八七六年イプセンの劇「ペール・ギュント」につけた音楽で成功。ほかに「ピアノ協奏曲」。

▲2月5日　奥村五百子(61)
社会運動家で、明治34年愛国婦人会を結成。出征兵士や家族救護活動を行い、会員数十万人の組織に発展させた。

▲1月20日　角藤定憲(39)
俳優で、明治21年大日本壮士改良演劇会を結成。「耐忍之書生貞操佳人」などを上演し、新派劇の創始者となる。

▲12月16日　浅井忠(51)
洋画家。明治22年明治美術会結成。関西美術院院長もつとめ、安井曾太郎などを育成した。代表作に「春畝」。

毎日新聞社

▲9月6日　名村泰蔵(66)
司法官。蘭・英・独・仏語などを習得。明治19年大審院検事長、25年同院長心得に就任。貴族院議員もつとめた。

▲3月12日　松本順(74)
医者。明治6年初代陸軍軍医総監に就任、後に貴族院議員。また海水浴を奨励し、神奈川県大磯に海水浴場開設。

▲1月31日　西村勝三(70)
実業家。明治3年伊勢勝製靴工場を創設し、洋靴の製造開始。20年には品川白煉瓦製造所を設立した。

# ミニ事典

## 1907年のキーワード

### 土地復権同志会

明治三五年に、宮崎民蔵らによって東京で結成された、土地私有制反対を掲げた団体。天賦人権論に基づき、土地は天造物とし、全人類への均等配分を主張。日露戦争で中断したが、この年八月までに民蔵自身が一六府県を宣教。二月一二日には山梨県市川大門町の小作人が、小作組合解散命令に反発して四〇〇人も加盟するなど隆盛をきわめたが、官憲に危険思想とみなされ、「大逆事件」の際に弾圧され解散した。

### 廃兵院

戦闘で負傷・罹病し、自活できなくなった下士官・兵を扶養する施設。ヨーロッパには古くからあったが、日本では、この年二月一五日に開院した東京廃兵院が最初。ただし、当初の定員は二〇〇人で、日露戦争で発生した多数の「廃兵」は、増加恩給などわずかな公的援助を受けるだけの、苦しい生活を強いられた。「廃兵」の名称は、その後、「傷病兵」、さらに「傷痍軍人」と改められたが、昭和二〇年の敗戦で、すべての「恩典」を失い、放置された。

### 「父母を蹴れ」

社会主義者・山口孤剣が、三月二七日付の「平民新聞」で説いた、封建的家族制度からの解放論。発行人が禁固六カ月の判決を受け、孤剣は同三カ月。新聞は発行禁止となった。前年二月、西園寺内閣は社会党結党届けを容認したが、これは建て前にすぎず、大会で幸徳秋水の直接行動論が主流を占めると即、結社禁止。以降、翌年の赤旗事件を経て「大逆事件」にいたるまで、社会主義者に対する仮借ない弾圧が続いた。

「太陽」

▲4月25日、入獄を前に日比谷公園で行った記念撮影。2列目中央が山口孤剣。

### 樺太庁

日露講和条約後、日本領となった南樺太(サハリン島の北緯五〇度以南)を統治した行政機関。四月一日、樺太庁官制実施、庁舎が大泊におかれた(翌年八月、豊原に移転)。初代長官は樺太守備隊司令官・楠瀬幸彦陸軍少将が兼任。昭和二〇年八月ソ連が軍事占領するまで存続、内務大臣・総理大臣などに直属したが、昭和四年からは拓務省に移管された。

▲6月15日に行われた樺太庁開庁式。式は大泊の旧日本領事館跡地で行われた。

### 帝国国防方針

日露戦争後、政戦両略の一致、陸海両軍協調による統帥強化をめざして定められた最高国策。元帥・山県有朋の私案をもとに、四月四日制定。仮想敵を露・米・独・仏の順とし、所要兵力、戦略計画の策定をはかるとした。ただし首相は戦略計画に関与できず、また仮想敵に関しては、陸軍の対露主敵論に対し海軍は対米主敵論を強調、両者の争いは太平洋戦争時まで続く深刻な問題となった。

### 芋銭漫画

日本画家・小川芋銭(一八六八～一九三八)が、「平民新聞」や「国民新聞」「社会新聞」などに描いた風刺マンガ。「社会新聞」は六月二日創刊の社会主義新聞で、農村の生活を飄々としたタッチで描く"芋銭漫画"を掲載、人気を博した。芋銭は茨城県牛久村に住み、幸徳秋水らとの交友を楽しむ一方、河童を描くことを終生の課題にした風狂人だった。

▲農民の苦しさを描いた、小川芋銭の漫画。

### 第三次日韓協約

日本が韓国を保護国化するにあたって、三次にわたって締結した条約の仕上げ。七月二四日調印。法令や行政処分の承認、上級官吏任免への同意などを、日本側の権利として規定し、第二次日韓協約で外交権を放棄した韓国は、この協約によってさらに内政権も奪われた。前月末、ハーグ密使事件が起き、日本はこれを利用、皇帝退位、協約調印、韓国軍隊解散などを強要、韓国保護国化からさらに併合化へと歩を進めた。

### 英露協商

八月三一日、イギリスとロシアの間で締結された、利害調整の取り決め。チベットにおける中国の宗主権確認と内政不干渉、イランにおける英露両国の勢力範囲、アフガニスタンを英国の勢力範囲とすることなどを決めた。これにより露仏同盟、英仏協商を合わせて三国協商が成立、対ドイツ包囲網が完成。ドイツを中心とした三国同盟との対立は、第一次世界大戦の要因のひとつとなった。

### 箕面有馬電気軌道会社

大阪の中心部と田園都市・宝塚を結ぶ郊外電車。一〇月一九日設立。専務取締役に就任した小林一三の斬新な発想と経営手腕で急成長、後の阪急電鉄へいたる基盤が作られた。小林は大衆娯楽や郊外住宅を鉄道経営と結びつける私鉄の経営戦略を創案、宝塚新温泉・宝塚少女歌劇などを生み出し、大阪―宝塚の鉄道経営にも成功。ターミナルデパート・阪急百貨店も小林の創意だった。

### 日米紳士協約

アメリカでの日本人移民を制限する取り決め。オブライエン米駐日大使が林董外相に、厳重な労働者渡航制限を励行するように要請した一一月一六日付書簡を第一号とし、両国が交換した七通の書簡・覚書で成立。この頃、日本人移民への襲撃事件が頻発、両国は早急な合意を迫られていた。この協約により、米国の旅券発給は、すでに定住するものまたはその両親・妻、二〇歳以下の子どものみとされた。

### ブルーリボン

大西洋横断のスピード記録を持つ船に与えられる栄誉。慣例的に、平均速力を比較。名称は、英国のガーター勲章のリボンの青色から名づけられた。この賞がいつ始まったかは明らかでなく、初期には英国が独占したが、次第に米・独・伊・仏が獲得。この年一二月五日、キュナード汽船会社の「モーレタニア号」(「ルシタニア号」の姉妹船)が二四・八六ノットの新記録を出し、英国が久々に栄誉を奪い返した。

## 週刊YEAR BOOK／日録20世紀 1907

CONTENTS




●編集
講談社総合編纂局
アート・ディレクター／山口至剛
表紙デザイン／山口至剛デザイン室(茂村巨利)＋渡邉裕二
本文レイアウト／デザインオフィス八起き
編集協力／(有)エービーシープレス　(株)カマル社　(株)コミュニケーションハウス・ケースリー　シド・プロ　(有)マックス　(有)マライカ
飯田守　小原伸夫　鍵和田良輔　菊地美優貴　小松邦宏　張替政展　藤森雅弘　森邦久　結城順一　吉田忠正

●写真協力
阿部徹雄　石井美雄　楠田守　近衛通隆　但馬一憲　田代真一　徳川文武　布目英一　和田大作
「イリュストラシオン」　オリオン・プレス　CORBIS・BETTMANN　SIPA・PRESS　中国通信社　PPS　平凡社　Popperfoto　毎日新聞社　ユニフォト・プレス　ROGER-VIOLLET　イサミ堂　キリンビール　富重写真所　中村屋　ニチロ　房の露　宮内庁　木馬亭　森下仁丹　馬の博物館　霞会館　三越資料編纂室　県市企画部　海事博物館推進室　古書複製社　産業技術記念館　三康図書館　自転車文化センター　島津創業記念資料館　セイコー時計資料館　大英博物館　中国文化省　東京国立近代美術館　東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫　東京動物園協会　日仏会館図書室　日本近代文学館　日本ゴルフ協会　日本漫画資料館　日本浪曲協会　富士吉田市　文京区立鷗外記念本郷図書館　北海道大学附属図書館　舞鶴市立赤れんが博物館　前田育徳会　民音音楽資料館

定価560円

雑誌　23714-11/24　T1123714110564
Ⓛ-2001/1/1




印刷　凸版印刷株式会社　製本　本村製本株式会社